

昭和十一年三月三日

修監 馬生島友 村藤崎鶴 32-B 88

金の船



十一月
 国立国会
 8. 3. 26
 図書館

第十壹號

卷參

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G
 Y
 M

© Kodak 2007 TM Kodak

Kodak Color Control Patches
 Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM Kodak

inches 1 2 3 4 5 6 7 8
 cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

ニッポ
ホーン
鷺印
レコード



大正十年十月新譜御案内

曲種	曲名	演奏者
帝國	常陸丸	東京 松田翠濤
端唄	御所車	共立檢 八人
流行唄	鴨綠江節	東京 梶原華讓
萬歳	義太夫ふきよせ	神戸 砂川拾丸
浪花節	越後騒動	東京 木村重松
書生節	濱田榮子	東京 宮島郁芳
獨唱	波蘭歌	ゴリラ スタベール
萬歳	説教	神戸 砂川拾丸
地唄	黒髪	神戸 共立檢

(美麗なる月報御
申越次第贈呈)

株式会社 日本蓄音器商會
東京 東區橋區銀座一丁目
大阪 東區南久寶寺町四丁目

西條八十先生著 (岡本歸一先生挿畫)

純白ラフ紙綴入天金本文用紙
定價金一圓八十錢 送料十三錢

愈發賣 童話集 不思議な窓

内容

- △お月様に腰かけた話
- △人魚ものがたり
- △不思議な窓
- △花束の秘密
- △六さんと九官鳥
- △アマミとお姫様
- △牛の卵
- △地の底の兄弟
- △金貨一枚
- △モン公とトン公

● 詩人として名聲高き著者が、特に幼き人々の爲に執筆された詩味深き童話集を収めたものであります。本書の特色は、著者が吾國に於て會て、ためしのない純藝術的童話の製作を試み、美事にこれを完成した點にあります。たとへば愛蘭土の詩人ダンセニイの散文詩、佛蘭西の作アナートルフランスの小説、さうした立派な作者が著者の手によつて、三歳の児童にも解し易く美しく懐しき物語りと化せられてゐます。しかも著者の高貴なる氣稟、その魅惑的なる麗筆は、これらの童話を、さながら無韻の詩の如く恍惚の中に誦させねばおきません。單に児童の讀物以上一般詩を愛する若き方々にお勧めいたします。

西條八十 抒情小曲 静なる眉 九十錢
竹久夢二 詩畫 靑い小徑 九十錢
先生著 集 送六錢

野口雨情先生著 五十夜月 廿圓
送八錢

東京市神田區 尙文堂發行 振替 一三九 東京 四四 京西

生田春月氏編 ■ 十三版 ■ 菊半六號 ■ 二百餘頁 ■ 裝幀極美 (後に八百頁以上)

日本民謡集

定價 一圓五十錢
送料 八錢

日本のあらゆる民謡中特に藝術的價值高きものを厳選網羅せる一大集成である
日本の民謡を知らんとせば本書一冊にて充分の満足を得らるゝ。

一戸理學博士序 ■ 渡邊農學士著 ■ 二十三版

林檎の落つる音

定價 壹圓卅錢
送料 八錢

此書には六十余篇の面白い科學の話が満載してある、どれを読んでも取りぐ
に面白く不知不識の間に子供の頭腦へ科學の智識を植ゑ込むことが出来る、最
も新時代に適應した子供の讀みものである(文部省認定)

西條八十・西川勉氏共編 定價貳圓八拾錢 送料拾八錢

日本童謡選集

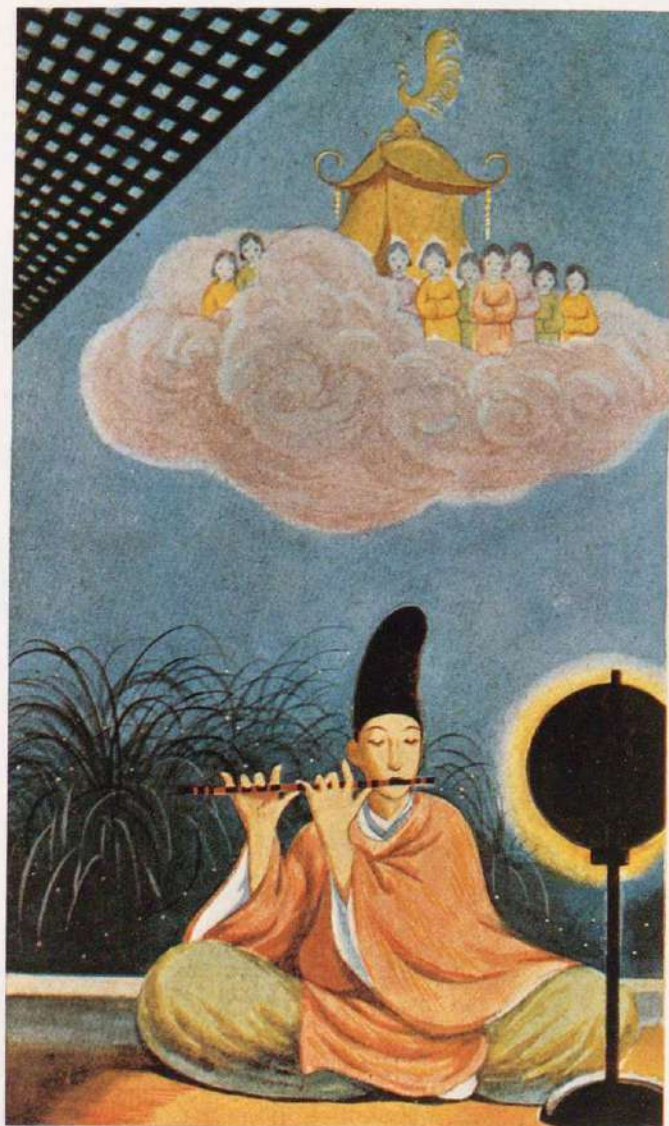
佐々木左作挿畫 四六版箱入、五百餘頁

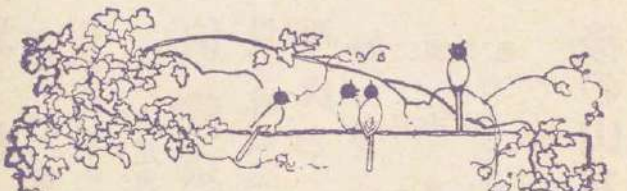
西野北三西若島相伊藤
條口原木川山木馬藤森
八雨白露 牧赤御輝秀
十情秋風 勉水彦風 子夫

其他二十九家の
神品を網羅して
詩壇の權威全
本書に集る然し
て童謡は如何に
復興したか如何
何に勃興したか
童謡の物興は日本詩壇の一大發見で、あらゆる
詩人が童謡に筆を染め、あらゆる新聞雜誌が各詩人
の手に依つて制作されたる童謡を掲げ、然も、それ
が國民の同情と、授けと支持を受けたといふやうな
時代は、世界の何れの國の文學史上にも、曾て類例
を見ざる日本獨特の運動です。兒童にはよき詩歌を
興へ、成人の精神には清淨なる幼時の記憶を喚び起
さうとする童謡の物興乃至復興運動は、單に詩壇の
みならず、教育界に取つても、兒童の家庭に取つて
も、更に繁忙なる事務に執事せる人々に取つても、
大なる意義を持つてゐると云はなくてはなりません
本書は尙も童謡に筆を染めた各詩人の傑作を集め
本書は西川勉先生の「日本童謡の歴史的研究」に關する研究を掲げ、
復、一面には諸外國の童謡に抄し、一面には古事記、日本書紀の時代より、現代に
互に童謡の發達を會得し、且つ大正詩壇の童謡の物興乃至復興運動に努力せられた
る詩壇諸家の珠玉に接することを得ます。

東京市牛込區 東橋本 稻門堂書店 電話一〇九八番 一〇九二番 五五番


東京市神樂町 越山堂 電話九一〇九番 九二〇九番 九三〇九番

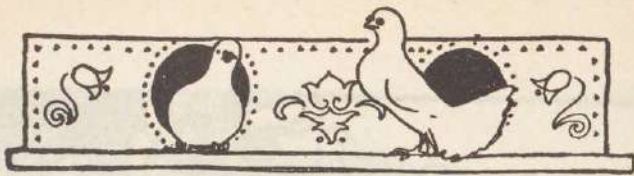




 笛を吹けば 岡本歸一畫

中將はまさかとは思ひながら、それでも座敷を
 浄めて、香を焚いて静かに笛を吹いてゐました。
 だん／＼月が上つて、その光が世界中に一はい
 ひろがつた時、どこからか香しい風が吹いて来て、
 ふしぎな音楽がかすかに聞えて來ました。やがて、
 十六人の童子が、金のお輿を守りながらそろ／＼
 と下りて來ました。(建天國の第一頁の挿畫)





千代田のお城

本居長世作曲



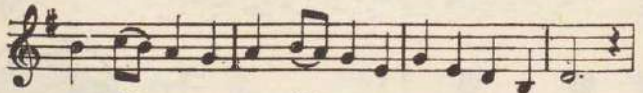
3 4 3 2 1 | 2 3 2 1 6 | 1 6 5 3 | 5-0 |

ちよーたのおしーろのはさぼつぼ
チヨーダノゴモンノシロイカ



5 5 5 5 | 1 0 2 2 | 2 2 3 1 | 2-0 ||

はさぼつぼ ぼこないてたよ
ハトボッポッポトナイタタヨ



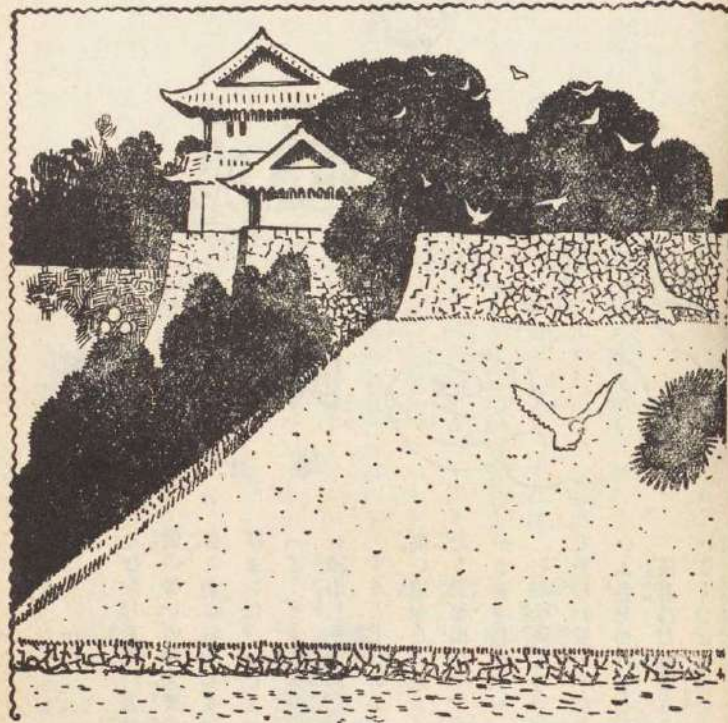
3 4 3 2 1 | 2 3 2 1 6 | 1 6 5 3 | 5-0 |

ちよーたのおはーりのあをいみつ



5 5 5 5 | 1 0 2 2 | 2 5 5 2 | 2-0 ||

はさぼつぼ ぼこないてたよ



啼いてたよ

鳩ぼつぼ ぼつぼと

青い水

千代田のお濠の

白い壁

千代田の御門の



千代田のお城

(金の船 藝術唱歌、その一)

野口雨情

千代田のお城の

鳩ぼつぼ

鳩ぼつぼ ぼつぼと

啼いてたよ



梵天國
楠山正雄

一
むかし京都に五條の右大臣といふ人がありました。子供のないのを大層悲しがつて、或時奥方と二人清水の観音さまにおこもりをして、三千三百三十三度のお祈を上げました。そして、
『どうぞ子供を一人おさづけ下さいまし。』とねつしんに
お願申しました。
すると七日めの夜、右大臣は夢を見ました。それは氣高い風をした坊さんが出て来て、ふところからきら／＼光る玉を出して、右大臣の左の袂に入れたと思ふと、目がさめました。
その後間もなく、右大臣の奥方は身重になつて、やがて美しい男の子が生まれました。右大臣はこの子に玉若といふ名をつけました。
玉若はだん／＼大きくなつて、とう／＼三位の中將といふりつばな位に上りました。それでみんな玉若を、中將、中將と呼ぶやうになりました。

中將がまだ十五にならない前、おとうさんもおかあさんもおなくなりになりました。中將は大層なげいてゐました。

中將はやがて、七日七夜の間笛をふいて、おとうさんとおかあさんのみたまを慰めて上げようと思ひ立ちました。この人は生れつき笛が上手で、それは神さまが吹いていらつしやるやうな氣だかい音を立てました。ちやうど七日七夜の間笛をふきつゞけて八日めの朝でした。早く東の方の空から一かたまりの紫色の雲が降りて来て、中將のお屋敷のお庭の上にとまりました。雲の上には十六人の童子と天人がのつてゐて、金のお輿を守つてゐました。やがて中からりつばななりをした天人が一人出て来ました。そして中將に向つて、はら／＼と涙をながしながら、
『おとうさんとおかあさんのお供養の爲に、七日七夜の間にあなたのおふきになつた笛は、上は梵天國までつきぬけ、下は龍宮までも聞えました。みんな孝行の徳に感じてゐます。わたしに一人娘があります。』

十八日の夜、梵天國からあなたのおへお嫁に上げることにしませう。お屋敷を淨めて待つてゐてもらひたい。さういふわたしは梵天王です。』

かういふと紫色の雲はまたそろ／＼舞ひ上がつてやがて空へ消えて行きました。中將は夢のやうな氣がしながら、やはり靜かにお經をよんで、
おとうさんと



おかあさんの爲にお祈をしつてゐました。
やがて十八日の夜になりました。中將



はまさかとは思ひながら、それでもお座敷を浄めて、香を焚いて静かに笛を吹いてみました。だん／＼月が上つて、その光が世界中に一杯ひろがつた時、どこからかかんばしい風が吹いてふしぎな音楽がかすかに聞えて来ました。やがて十六人の童子

はのこらすきれいな玉でかざつた冠をかぶつて、金のお輿を守りながらそろ／＼と下りて来ました。お輿の中から十四五のお姫さまが出て来ました。玉で飾つた金の冠をかぶつて、錦の着物を着、緋の袴をはいて、目のくらむやうな氣高いすがたをして

ました。中將が、「こちらへ。」といひますと、姫はしづかに下へ降りて来て、錦の褥の上に坐りました。そしてお供の天人たちはまた雲に乗つてかへつて行きました。中將は梵天王のお姫さまとさつそく御婚禮をしま

した。こんなに仲のいゝ美しい御夫婦は世界のどこにもない、と思はれるほどでした。

二

そのうち大空から下つた梵天國のお姫さまが、人間の女に誰一人くらべやうのない美しい人だといふ評判はだん／＼高くなつて、とう／＼天子さまのお耳にまではいりました。天子さまはお姫さまをちらんになりたくお思ひになりました。それで、或時中將をおよびになつて、

それを罷に入れて、中將は天子さまにお目にかげました。

それから七日の間、鳥は天子さまの御殿のお庭の上で極樂の歌を囀つて、極樂の舞を舞ひました。天子さまは大そうおよろこびになつて、中將にたくさんごほうびを下さいました。そして七日すぎると、鳥はいつの間にか、梵天國へかへつてしまひました。

それからしばらくすると、天子さまはまた中將をおよびになつて、こんどは、「鬼の末娘の十郎姫をさし出せ。それができなければ奥方を御殿へ上げよ。」とおいひつけになりました。こんども中將は困つて、奥方に相談をしますと、奥方は笑つて、

「まあ、その女はおとうさまの召し使ひでございませう。すぐによんであげませう。」

かういつてまた縁側に出て、南の空に向つて、三度手をたゝいて、

「十郎姫、十郎姫。」と呼びますと、十郎姫はすぐに



「お前のお方を七日の間、宮中へ上げよ。それがいやならば、極樂の迦陵頻伽といふ鳥をとつて来て、七日の間わたしの前で舞はせて見せよ。それもできなければお前を日本の國から追ひ出すぞ。」ときびしくお申しつけになりました。

中將はかういふ難題を頂いて、どうしていか途方にくれてしまひました。しかたがないので、うちへかへつて、奥方に話をしますと、奥方は笑つて、

「まあ、迦陵頻伽なら、梵天國のおとうさまのお宮にたくさん居ります。すぐによび寄せませう。」といつて、縁先に出ました。そして南の空をながめて、三度手をたゝいて、

「迦陵頻、迦陵頻。」とおよびになりますと、鳥はすぐ飛んで来ました。

出て来ました。中將は十郎姫をつれて天子さまのおそばへ上りました。

天子さまは大そうお喜びになつて、七日七夜の間十郎姫に歌をうたつたり舞を舞つたりさせてごらんになりました。十郎姫は、七日の間毎日々々いろいろ衣裳を着かへて、そのたんびにめづらしい歌と舞をお目にかげました。そして七日すぎると、梵天國へかへつてしまひました。

天子さまは十郎姫の美しい聲をお聞きになつて、梵天國では召し使ひでさへこの位美しいのだから、お姫さまはどんなにきれいな人だらうとおかんがへになりました。ですからいよ／＼お姫さまをごらんになりたく思召して、また中將をおよびよせになりました。そしてこんどは、

「空の雷をよんで見せよ。それができなければ、奥方をさし上げよ。」と、きびしくおいひつけになりました。中將は「んどこそはどうにもならない難題だと思

つて、ばんやりしながらうちへかへつて来ました。そして奥方に、

「もうどうしようもない。じつに困つたことになつた。」と話しますと、奥方はやはり笑つて、

「それは何でもないことです。この國でこそ雷のことを鳴神などといつて、みんなこはがるやうですけど、梵天國ではあんなものはたゞのいやしい下郎です。すぐに呼んであげませう。」

かういつて縁側に出て、空に向つて三度手をたゝいて、

「八大龍王、八大龍王。」とよびますと、どこからわき出したともなく、からかさぐらゐの大きな黒い雲が、愛宕の山を越えてとんで来て、奥方の前に舞ひ下がりました。

「お、龍王たち、よく来てくれた。天子さまがごたいくつをなすつて、七日の間雷をよんで音を聞きたいといふ仰せです。」とさもなくやしやうにいひました。八大龍王はさつそく承知して、すぐ雨風になつ



て御殿のはうへ飛んで行きました。中將もそれに
いて、御殿に上がらうとしますと、奥方はその時雷
よけの頭巾を出して、

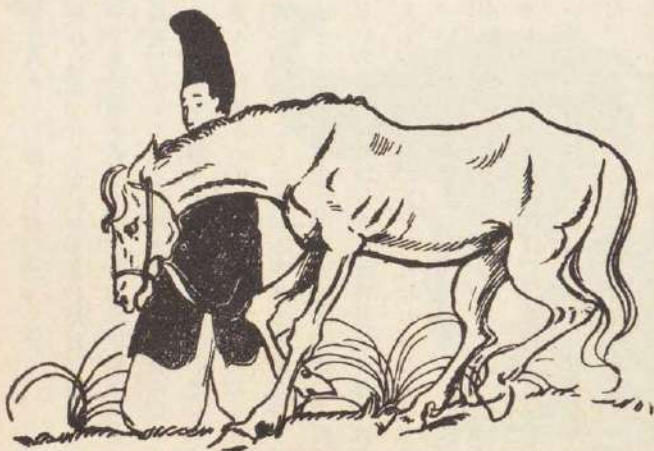
「これをかぶつていらつしやい。雷がなり始めたら
耳の皮が破れてしまふでせう。そして稲妻が光り出
したら目がつぶれてしまふでせう。」

と、いひました。

間もなく大きな雷が一つ二つごろ／＼と鳴り出し
ました。もうそれだけでもみんなびつくりして耳を
おさへてゐましたが、やがて四つ五つとたてつゞけ
に鳴り出して、しまひには何百千といふ雷がしきり
なしに、ごろ／＼ごろ／＼鳴り出しました。その間
にからかさをひろげたくらゐの大きな光りものが
一つ二つとんだと思ふと、やがて五つ六つとおほく
なつて、おしまひには何百千といふ光が太陽のやう
に明るくかゞやき出しました。雷と稲妻ばかりでは
ありません。

強い嵐がそれにつゞいて起つて、都の町の建物や

「龍王もつかへつて下さい。」
といひますと、ばつたり嵐が止んで、雷がしづまり



立木の半分は押し倒してしまひました。川といふ川
は、みんな溢れて、大へんな洪水になりました。雷
に打たれたり、屋根や塀に押しつぶされたり、大水
に流されたりした者はどのくらゐあるか知れませ
んでした。

天子さまはさすが御自分からおいひ出しになつた
ことですから、どうかして七日の間辛抱しようと思
をくひしばつてがまんをしておいでになりました
が、とう／＼お耳の皮は破れてしまひましたし、あ
んまりおどろきになつたので、氣ぬげのやうにな
つて、死にさうな顔をして倒れておいでになりまし
た。御殿中の人たちは、大臣やお公家たちから、い
やしいものまで生きた氣のしてゐるものはただの一
人もありませんでした。

その中で中將だけはこの騒ぎもまるで耳に聞えな
いので、一人へいきな顔をしてゐました。でも天子
さまはじめいかにあつておいでになるところを
見ては、うつちやつてはおけないので、空に向つて、
ました。そして明るい青空に日がのどかにかゞや
いてゐました。

天子さまは迎陵嬢から、鬼の末娘の十郎姫、おしま
ひに雷と稲妻までよび出して、死ぬやうなひどいめ
におあひになりましたが、それでもやはりこれに懲
りて梵天國のお姫さまを思ひきることが、おできに
なりません。それどころではありません。も
う二三日立つと雷で困つたことはけろりと忘れたや
うに、

「迎陵嬢や鬼の娘から、雷や稲妻までも、よべばす
ぐ出てくるくらゐだから、こんどはいつそ梵天國へ
行つて、梵天王の手形をとつて來てもらひたい。」
かういつて中將をおせめになりました。

中將は重ね／＼の難題にがっかりしながら、うち
へかへつて奥方に、
「どうしたものだらう。」
と、話しました。

すると奥方はこんどこそ困つたやうな顔をして、

涙をほろ／＼こぼしながら、

『それは困ったことになりましたね。わたしはこの國へ下る約束があつて、かうして下界の人たちの仲間に交つてくらは居りますが、梵天國へまたかへつて行かうと思へばそれはできないことではありません。たゞその代り一度かへれば、もう二度とこの國へかへつてくることはできません。ですからこれはどうしてもあなたに梵天國まで行つて頂くほかはないのです。しかしそれは容易なことではありませんし、長いおわかれをしなければなりません。』

と、いつてまた泣きました。

中將は情なさうに、

『でもそれができなければ、わたしは唐か天竺か、とほい外國へ追はれて、虎狼の餌食になるほかはないのだ。あなたさへよければ、いつそあなたを天子さまにさし上げようかとも思ふ。』

すると奥方はくやしさに、



冬枯れで山の木の葉は皆な散つてしまひました。野原一面に生えてゐる萱徳が白うく風に揺いでゐました。金九郎

爺さんは、お秋婆アさんと二人で野原へ萱刈りに行きました。

爺さんと婆アさんとは、朝から晩まで萱を三荷づつ刈りました。そして四荷目の萱を刈らうとした時繁つた萱原の中に、お鍋の蓋程の圓い穴を見つけた

『でもあなたとおわかれしてよそへ行くなどいふことは、梵天國の者にはできないことです。それではかうなさいまし。今日から七日の間お精進をして毎日一度づつ七度水ごりをとつてからだを清めて下さい。それから愛宕山の上のぼつて、東の方をごらんになると、たくさん道のある中に一番細い道がかすかにつゞいてゐます。その道を七里ばかり歩いておいでになりますと、大きな木があります。その木の下に三びき馬がつないでありますから、その中の一ばん瘦せた馬をひいてこゝまで連れていらつしやいまし。それからあとはいいやうにしますから。』

と、をしへました。

中將はをしへられたとほり愛宕山の峯に上つてみますと、六つに道が分かれてゐました。その道を七里ばかり歩いて行きますと、大きな木が一本あつて青い毛の馬と、白い毛の馬と、鶯色の毛の馬が三びきつないであります。その中で一ばん瘦せた青い毛の馬をひいてかへつて來ました。(つゞく)

冬枯れ

沖野 岩三郎

した。

『爺さん、これは何の穴でせう?』と婆アさんが問うた時、爺さんは直ぐ、

『それは狐の穴だよ、其の中には二疋の大狐が居るんだ。』と云ひました。

『さうですか、それぢやア、此の穴の周圍にある萱は刈らないで置いてあげませう。最う冬枯れで、冷たい風が吹いてゐますから。』と言つて婆アさんは穴の中を覗き込みますと、中には茶色の狐の尻尾が一寸ばかり見えてゐました。

『婆アさん、そんな事を言はないで、皆な刈りませう、この萱は随分いゝ萱だよ。』

『だつて、これを刈つてしまふと、狐さんのお家が

「寒くなりますよ。」

「なアに、此の晝を刈つてやると、さッぱりして氣持がいよと云つて、狐どんは喜ぶに違ひない！」

「先ア、爺さん、そんな事を云ふものぢやアありませんよ。今は冬枯れですから。」

「冬枯れも夏枯れもあるもんですか。刈りませう、刈りませう。」

言ひながら金九郎爺さんは、其の晝を刈つてしま



「伊勢の古市へ？ お祭りでもあるのですか。」

「富圃がありますので……」

「富圃って、何ですか。」

「富圃ってのは、百兩お金を出して、一枚の富圃札を買ひますと、運が好かつたら一萬兩の圃に當るのです。」

「では、百兩のお金で一萬兩儲かるといふのですか。」

「さうですとも、運が好かつたら一萬兩儲かりますよ。私はこれから伊勢へ行つて其の富圃を買つて、一儲けして来るつもりです。」

「さうですか、では、あなたは百兩のお金をおもちですか。」

「私は三百兩もつてゐます。」

「其の中の百兩を私にお貸し下さいませんか。」

「貸す事は出来ませんが、此の家を私に百兩で賣つて下さいませうなら買つて上げませう。」

「こんな小ッぼけな家でも百兩に買つて下さいませう。」

ひました。婆アさんは口の中で、「可哀さうだがなア。」と言ひながら一緒に晝を刈りました。そして四荷目の晝を刈つて、家へ歸つた時は最うトツプアリと日が暮れてゐました。

「冬枯れたなア、寒い〜。」と言つて金九郎爺さんは爐に温まつてゐました。お萩婆アさんは、水ッ涕を流しながら爐の傍で草履を作つてゐました。暫くすると、表の戸をコッ〜と敲く音がしました。

「どなたです？」と言つて、金九郎爺さんが入口の所へ行つて障子を開けますと、其處には茶色の衣を着たお坊さんが、冬枯れの寒い風に吹かれながら立つてゐました。

「まア、お坊さん。あなたは今頃、どちらへ行らッしやいます？」

爺さんが訊くと、お坊さんはニコ〜笑ひながら「私はこれから、伊勢の古市へ参ります。」と答へました。

「えエ買ひますとも、さア即金で百兩……」

お坊さんは百兩の金を金九郎爺さんに渡して、其のまゝ家へは入らないで、伊勢街道の方を元氣よく冷たい風に吹かれながら、とッ〜と走つて行きま

した。

「婆アさん、あんたはお金をもつてゐるでせう？」

と爺さんが尋ねますと、婆アさんは、戸棚の中から細の革で作つた財布を取り出して来て、中を調べて見

ましたが、

「皆なで十二兩三分あります。」と云ひました。

「さうか、では、明日の朝から其の十二兩三分を旅費にして伊勢の古市へ行かう。そして、富圃を買つて一萬兩の大金持になつて歸らうぢやないか。」

爺さんが然う言つたので、婆アさんも直ぐ賛成しました。それから其の翌日二人は婆アさんの作つた草履を履いて、伊勢街道を東へ〜と行きました。

二人は寒い風に吹かれながら野を過ぎ山を越えて



六日目の夕方、伊勢の古市へ着きました。そして爺さんは直ぐ富商を賣る所へ行つて、百兩の札を買はうと思つて懐から革の財布を取出して中を檢べて見

「では、明日はお正月かい？」

「まあ、さういふ事になりますネ。」

「馬鹿に寒いア。」

「冬枯れですもの……」

二人はこんな話をしながら、自分の家へ歸つて見ますと、これは先アどうした事です。家は留守の間に綺麗に焼けてしまつて、白うい灰が焼跡に一升ばかり残つてゐるだけでした。

お金は一文もなし、其の上、お家が焼けてしまつたので、二人はぶる／＼顔へながら、其の灰を見詰めてゐますと、白い灰が俄かにムク／＼と動き出しました。

「呀！」

と云つて、爺さんは一歩後へ飛び退きました。

「きやーッ」と云つて婆アさんは、一歩前の方へ踰ぎめきました。

白い灰は見る／＼大きな二疋の古狐になつて、山の方へ走つて行きました。

ますと、さア大變です。財布の中には楮の枯葉が十枚あるだけで、お金は一兩半兩もありませんでした。

金九郎爺さんは吃驚しました。お萩婆アさんは泣き出しました。それを見た札賣りの爺さんは、二人の話を詳しく聞いて、

「それは多分、あなた方は夢でも見て居るのでせう」と云つて笑ひました。

爺さんと婆アさんは、致方がないから又たとぼとぼと自分の國へ歸りました。

「夢であつたかなア。」と爺さんは峠の石に腰をかけながら、嘆くやうに言ひました。

「ねエ、あんな小さい小屋が、百兩にも賣れる筈はない！」と婆アさんは、口惜しさうに云ひました。

「さア、もう三里だ、歸りませう。」

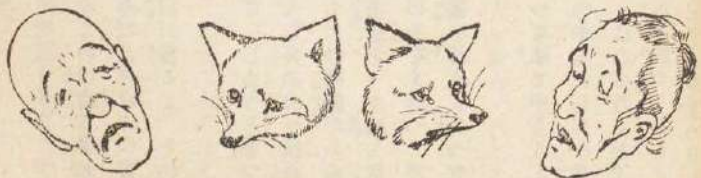
「えエ、もう三里だ、歸りませう。」

爺さんと婆アさんは、眼を白黒して其の狐を見送つてゐますと、この間の晩に來たお坊さんが不意に眼の前に現はれて、

「金九郎爺さん、さッぱりして、氣持善くなりましたなア。」と言つて、から／＼と笑ひました。

冬枯れで山の木の葉は皆な散つてしまつて、野原一面に生えてゐる枯れた葎の穂は白うく風に揺いでゐました。

金九郎爺さんは、お萩婆アさんと二人で、其晩から何處ともなく、遠い／＼旅へ出て行つたとき、二度と歸つて來ませんでした。(をほり)



おみやげの



一きとしわを

一

十一月二日。この松茸ちやとんだ目にあつたんだよ。そのつもりで食べないと罰が當るよ。それはかう云ふ譯さ。

此所へみやげにしようと思つて村の人達三四人と裏の山へ松茸をとり米俵のふたの圓葉があるだらう。あれは山を下りる時お尻にしいて、枯草の上をすべつて來るのぢや。その葉を持つて行つたんぢや。

たくさんつて來てやらうと思つて、目を皿のやうにして一生懸命四方八方見まはして行くと、すつと下の谷の木の根つこのところに、大きな奴があるのを見つけた。



二

きつとまはりには小さい奴が澤山あると思ふと、私は一人で皆なとつてやらうと思つて、皆なに「どうも先へ行くといかん。わしを一番あとにしてくれ」と云つて皆なを先へ追ひやつた。

幸ひと離れも氣がつかない。私はわざとぐづ／＼して、早く皆なが行つてしまへばいゝがと思ひながら待つてゐると、幸ひに誰れも氣がつかないと見えて行つてしまつた。

さあかうなればしめたものだ。今にうんとこさつて來て驚かしてやるぞと、例の葉をお尻へかつてすべり下りた。



息をふき返して見ると、その時はもう蛇はゐなかつた。しかたなしに皆なに話をすると、多分蛇の方でも寝て居るときに、不意に變なものがぶつかつたので、驚いて逃げて行つたんだらう。怒ばるからだよと皆なが笑つたが、わしは笑ふどころぢやない。

今思ひ出してもぞつとするよ。やうやく友達のつたのをわけて貰つて、わしのと合せて持つて来たのだ。そんな目にあつた此の松茸だよ、とは今日田舎から来た私の伯父さんが、持つて来た松茸のかごをおみやげに出しながら私達に話した話です。随分ふつてゐるから日記につけておく。

(春雄さんの日記の中より)



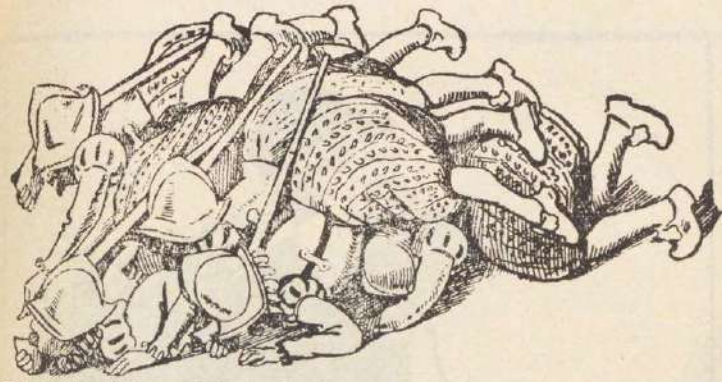
すべるは〜、つ…つとだんだん早くなつて行く。

いよ〜近くなつて見ると、おつたまげた。かみな！様にでも打たれたやうに縮み上つたよ。今の今まで松茸だとばかり思つてゐたのは、大きな蛇がとぐろをまいて、にゆうつと、つゝたてゝゐるかま首ぢやないか。これは大變！どうしようと思つてゐる間にもしゆう〜音を立てゝすべつて行つて、そのとぐろをまいてゐる真中へぐにやりとすべりこんでしまつた。

わしは、きやつ！と云つたきり氣絶してしまつた。やうやく友達が私の聲をきゝつけて、来て助けてくれる迄はなんにも知らなかつた。

鏡國めぐり (長瀬重隆)

西條 八十



十九、へんなお使者

おそろしい地ひびきがしたと思ふと、そのとたんに森の蔭からバラバラと兵士たちが駆け出して來ました。はじめは二人か三人づつ、それから十人ぐらゐ一かたまりになつて、終ひには出てくるは／＼森中が眞黒く兵士で埋つてしまふかとさへ想はれました。あやちやんはひよつとして踏みつぶされでもしては大變だとおもつて、一本の樹の蔭にかくれて様子をみてゐました。

あやちやんは生れてからまだ、こんな足もとの危つかしい兵士たちを見たことがありませんでした。みんな操り人形のやうにヒョロ／＼してゐて、しつかりなし何かに躓いてゐるのです。さうして中の一人が轉ぶと、さまつて大勢がバタ／＼將基倒しになつて轉るのでした。ですから見てゐる間に地べたは折重つた兵隊で一杯になつてしまひました。

すると今度は騎兵の馬が來ました。この方は四脚だけに幾分しつかり歩いてゐましたが、それでも時々やつぱり躓きました。そして馬が躓くたびに規則でもあるやうに、乗り手がスツテンコロリと地べたへ轉げ落ちるのでした。

こんな風に騒動は一刻ましにはげしくなつて來ましたので、あやちやんは一生けんめい出口を探してやつと、こゝ森の外へ逃げ出しました。見る／＼そこは廣々とした野原で、今しもその青い草の上にダイヤの王様が坐つて、しきりと手帳に何か書きつけてゐるところでした。

「どうだ、お前、こゝへ來るのみち、森の中でわしの兵卒どもに逢はなかつたか？」

王様はあやちやんの顔を見ると、眼をくり／＼させてかう訊ねました。

「え、逢ひましたわ。何千人も。」と、あやちやんが答へました。

「四千二百〇七人さ。ほんたうの数は。」と、王様は

手帳を見ながら云つて、

「そのはかにわしの使者が二人まで町へ行つて居るのだ。その歸りをわしはこゝで待つてゐるのだが、

どうだ、まだそこに姿が見えんだらうか？」

あやちやんは右手を眼のうへにかざして、遠く野原を走つてゐる白い路を見わたしました。そして、しばらく經つてから、

「あ、誰か來るやうですよ。けれどするまんのろのろ歩いてゐますわ。そして何て妙な恰好をしてゐるんでせう。」と、叫びました。

まつたくあやちやんの云ふ通り、その向から歩いてくるお使者といふのは實に妙ちきりんな姿をしてゐました。何しろ二本の手をお魚の鱗のやうに兩脇にひろげ、鰻のやうに身體をくね／＼／＼ねらせながら、それでびよん／＼／＼少しづつ往來を跳ねて來るのです。

「あれがこの國のお使者の風なのだよ。」と、王様は説明して、

「あれの名は「コラー」と云つてな。こちらから向へやる時の使者なのだ。あれのほかにもう一人、向から戻つてくるときの使者がある。その名は「ヘイ」と云ふのだ。」

「では行く方のお使者は行つたつきりで、戻つたお使者は戻りつきりになるんでせうか？」と、あやちやんがふしぎさうに王様に訊きました。

「さうさ、知れ切つたことぢやないか。一人で رفتり戻つたり、そんな藝當が出来るもんぢや無い。」と、王様は澄まして返事しました。

そのうちに妙な恰好のお使者はふたりの傍まで来ました。ひどく息ぎれをしてゐると見えて、黙つて両手を上げ下げしながら、それは「恐い顔をしてヂツと王様をみつめてゐました。」

「あゝ何て恐い顔をするんだ。おれは氣絶しさうだ。」と、王様は頭を抱へて、それから急に、

「わしにサンドキツチをくれ。」と云ひました。云はれてお使者のコラは頭によら下げた袋の中を



「ふ、た、り、が、ま、た、い、く、さ、を、は、じ、め、ま、し、たよ。」と、どなりました。

「そ、そ、それが内證話かッ！」と、王様は氣の毒に、びつくりして思はず飛び上つて、かう叫びました。そして、

「怪しからん！ 實に怪しからん！ 見ろ、わしの

ガサ／＼やつて、サンドキツチを一きれ取り出し、それを王様に手わたしたので、あやちやんはをかしめて吹き出しさうになりました。王様はまたそれを大急ぎでモガ／＼喰べました。

「もう一つサンドキツチ。」と、やがて王様は手の甲で口のまはりを拭いてから云ひました。
「もう在りません。あとには枯草が残つてゐるだけです。」

と、コラが袋のなかを覗きながら返事しました。
「では改めて訊くが、町の様子はどうかや？」

王様は今度はさも／＼王様らしい太い聲を出してお使者の方を向き直しました。

「それは内々で申しあげます。」と、お使者のコラは云つて、両手を口に宛がつて嗽のやうな形をこしらへ、それを王様の耳のそばへ持つてゆきました。あやちやんはこれを見て少々機嫌をわるくし、わざと外方を向いてゐますと、やがて、コラは内證話どころか、ありつたけの金切聲をだして、

頭の中はこんなになつてしまつたぞ！」と、お使者の方を向いて眞青になつて怒りました。

「まあ、誰が戦なんかはじめたんでせう？」と、今度はおやちやんがそばから取りなすやうに口を入れました。

「もちろん定つてゐるぢや無いか。獅子と一角獸とだよ。」と、王様が云ひました。

「何でまた戦争なんかするんでせう？」

「それが冗談ぢやない。いつもこのわしのかぶつてゐる王冠の奪り合ひなんだ。」

王様はいやな顔をして答へました。それから、三人はそろつて町の方へ駆けだしました。

二十、獅子と一角獸

來て見ると黒山のやうな見物にとりまかれて、獅子と一角獸とが闘ひのまつ最中でした。なにしろそこら中ひどい埃なので、初めのうちはどつちがどつ



「へい、なかにさかんにやつて居ります。どちらも今までに約八十七回轉りました。」と答へました。

ちやうどこの時、勝負は中休みになつたらしく見物がドヤ／＼動きました。王様は立ち上つて見物の方を向いて、

「十分間休憩します。」と、どなりました。それからへいに向つて

「おまへはあちらへ行つて知せの太鼓をたたくがい。」といひつてきました。そこでへいは鞭のやうにびよ／＼駈け出して行つて



ちやら一向わかりませんでした。そのうちやつと一角獣の方だけは、一本大きな角が生えてゐるので、見わけがつくやうになりました。

やがて王様はもう一人のお使者のへいがやつぱり人込みのなかに混つて見物してゐるのを見つけ、ツカ／＼その傍へ歩み寄りました。へいは片々の手にお茶碗を、片々の手にバタのついたパンのかけを持つてゐました。

「あの男は今しがた牢屋から出たばかりでね、牢へ入る時飲みかけてゐたお茶のあまりをやつと今飲んでゐるんですよ。それに牢屋の中では牡蠣の殻ばかり喰べさせられてゐたので、ひどくお腹が空いてゐるんですよ。」と、コラはそつとあやちやんの耳もとで囁きました。それから、

「おい大將、どうしたい？」と云つて、さもなつかしさうにへいの首に手をかけました。

へいはふりむいて、ちよいと背いただけで、相變らずパンをかじりつづけました。

「牢屋はおもしろかつたかい、え、大將。」と、コラがまた云ひました。

しまひました。

「あやちゃんには面白い恰好をして駆けてゆくへいのうしろ姿を見送つてゐますと、耳もとでおそろしい鼻息が聞えたので、おどろいて見るとそれは一角獣でした。

一角獣はかくしに両手をつッ込んだなり、みんなのそばへブラ／＼歩いて來ました。

「今度こそおれの勝だよ。その王冠はおれのものだよ。」と、一角獣は王様の顔と、それから王様の頭の上の冠とをジロリと見てかう云ひました。

「まだ、まだ。」と、王様は青くなつて、ふる／＼顫へながら答へて、

「お前さんはまだその角で相手をぐさりとやりやしなかつたらう。」

「ウ／＼、まだ怪我はさせなかつたよ。」と、一角獣は無頓着に云つて、そのまま向へ行きかけましたが、ふとあやちゃんの姿が目にはいると、さも／＼胸がわるいと云ふやうな顔をして立ちどまりました。

小鳥

(推定童話)

日向ら系

黒い森の樹の上に

たつた一羽の白い鳥

寂しかる 寂しかる

銀の夜露が

ぼた／＼と

冷たかる 冷たかる



「何だな、これは。」と、一角獣がしばらく眺めたあとで云ひました。

「これは子供と申すもので、今日はじめて此國で発見されたものでございます。こしらへ物や賈物でない、掛引ぬきの正の物でございますから、どうぞお目をとめてご覧ねがひます。」と、コラが見世物の口上云ひのやうな恰好で説明しました。

「フーン。」と、一角獣はさも感心したやうに大きくうなづいて、

「おれは今日まで子供なんて昔噺にある化物だとはつかり思つてゐたよ。でこれは生きてゐるのかね。」
「生きてゐますとも。口もきゝますよ。」と、コラがまじめくさつて答へました。

一角獣はまるで夢でも見てゐるやうな目付で、あやちゃんをもう一べんしげ／＼眺めました。それからさも氣味わるさうに口をひらいて、

「おい子供、物を云つて見ろ。」
と云ひました。(つゞく)

お亥の子の柩

藤澤衛彦



三〇
祭の用意の種さへ手にはいらぬといふ始末
でございました。

「はて、不運といふものには限りのないもの
ぢや、あの柩の標子ではまだ幼女のやうぢや
が、かあいさうなものぢや、思はず其方
に氣を取られてをります。お葬式は段々に
進んで来て、おやうと思ふうちに、地蔵り
になつてゐる。此けでの人物の柩内にはいつ
て行きました。

「さう、講家の孫娘さんもおわるいさうだつ
た。まだそれほどでもないと思つてゐたが、
ひよつとしたら、……」と考へてゐるうちに、
例の柩が又柩内から出て來ました。お爺さん
がそれを、げんまうに見てをりますと、そ
のお葬式は、今度は、どしどしお爺さんの家
の柩内に掻き込まれました。お爺さんが、た
まげてゐますと、擔人の一人が聲をかけて、
「お爺さん、この葬式は長崎からやつて來た
りですが、行先は違つてゐるのです。それに

「あれ、お亥子様だつていふのに、お爺さん
にはその用意さへないやうに思はれましたの
で、それで捲へてあげてゐるのです。」
と、いふので、とがめることもありませんで
した。

其うちにお亥の子は掻き上げられる。そ
れを食べたお爺で、病氣の孫息子が元氣づい
て來たといふので、お爺さんが夢中に喜んで
なると、急に擔人が見えなくなつてしまつた
やうなので、驚いて見ると、まだお葬式の柩
が其儘に置いてあります。
お爺さんはそれを毎日心
配してをりましたが、いく
ら持つてゐても擔人が戻つ
て來ませんので、嫌になつて
一旦、自分のお寺へ預けて
置かうと、掻き出さうとし
ましたら、其担子に柩桶の
底が抜けて、さつくと
小判が零れ出ましたとさ。



三二
（お亥の子の柩）

「さあ、一晩ぐらゐならいいが、それで、明
朝になったら行先の見當がつくのですか。」と
お爺さんが問ひかへしました。
「そりやアもう」と擔人は答へて、嬉しう
に棺桶を座敷に掻き込みました。そして、く
れんくも膝を言ひましたが、次で表の方を見
返りますと、
「あの隣りの貧乏爺め、置場がないつて担廻
りやアがつたが、今に後悔じやあがれ」とぶ
つゝ、呪言をいふやうなので、
「これ、擔人さん、そんな惡口を言ふも
のでない。講家には病人があるで、縁起を損
だのだらうから」とお爺さんが申しますと、
「ではお爺さんちはどうです。」と擔人が申
しました。
「あは、わしの家には縁起を損ぐ程、幸願
といふものがやつて來てゐない。」とお爺さん
が笑ひました。
さうかうするうちに夜が更けましたので、
お互ひに寢に過ぎましたが、翌朝、ふとお爺
さんが眼を覺しますと、どこかで、べつたら



母の最期

窪田空穂

源氏の四人の若君の最期のありさまは前々號でお話しました。あはれな、そして健氣なお話はそれだけではおしまひになつてゐません。ついでとつさりありました。

四人の若君には、それぞれ守役の附いてゐたことは前にもちよつと云ひました。その守役は、無論今日も附添つてゐて、思ひがけなくも、自分たちの幼い主君の斬られてしまふのを、手出しをすることも出来ずに見せられてゐたのでした。

いよいよ四人の若君が斬られてお仕置が済んでしまつたと見ると、堪へに堪へて、ぢつとして看てゐた四人の守役は、ばたばたと死骸のところへ走つて行きました。そして首のなくなつてしまつた死骸を、それぞれに抱きかゝへて、聲を立て、泣きました。

一番小さい、七つの子守役は、内記平太といふ半番でした。平太は、袴姿の脚のどころの紐を解いて

涙をほだけ、短玉の袖になつた紐を自分の眼に押し當てました。そして云ふには、

「この若君のお世話を仕はじめてから今日まで一時もお働を離れたことはない。自分の年の寄ることは忘れてしまつて、早く御成人なさるやうにと朝晩に思つて、天のお日様のやうに尊んでゐたものを、今日かういふありさまを見るといふのは、何としたことだ。いつも手前の膝の上へお乗りになり、この紐を引張りながら、おれが大きくなつたら、知行を取らせると仰しやつたものを。轉變かも知覚められると、直ぐに内記、内記とお呼びになつた。そのお聲でさへ耳の底に留つてゐるものを、今このお姿は、目の前へちらつて、何として忘れられるものか。先生生きてゐたからとて、百年千年生きてゐられる自分でも無い。この若君の冥途のお世話を誰がする。恐しい氣がなされるにつけても、第一にお探しになるのは、此の自分だらう。生きてゐて苦しい思ひをするよりも、いつそ死んで主君のお伴をしよう。」

さう云つて平太は、腰の刀を抜いて腹を切つて死にました。内記平太のそのありさまを見ると、乙若の守役の原後藤次、

乙若の守役の針師水郎、乙若の針師の針師八の三人も氣を奪はれました。

「いかに平太の云ふ通りだ。自分も後れてはゐるまい。」と、云つてついで、腹を切つて死にました。

この守役の外に、輕い役をしてゐる二人の者があつて、附いて來てゐました。その二人も、

「幼くはいらしたが、情の深い主君だつた。代りに、誰を主に君に取りつといふ氣もない。自分たちもお伴をしよう。」

さう云つて二人は、胸しちがへて死にました。

六人の者の、死んで主君のお伴をするのを見ると、秦野次郎の下役の四五十人の者は、みんな感心してしめました。主君と戰場へ出て、一しよに死ぬのは當り前だが、かうした死に方は出来ぬものだ、口々に云ひました。

二

秦野次郎は、六條堀川の邸へ引つ返して來ました。それは、爲義の北の方は、まだ何事も知らずにゐるので、一切を知らせる爲でした。

北の方は、まだ八幡から歸つてゐませんでした。それで八幡の方へ向つて行きますと、赤井河原で、北の方の奥に逢ひました。

延景は、馬から下りて、奥の轎へ取りつきました。奥がそこへ据ゑられると、延景は、畏まつて一切のことを北の方に申上げました。

大殿（爲義）が、頭殿（義朝）をたよつて入らせられたので、命請をしたが、朝廷でお許がないので、昨日の明方、七條朱雀でお斬り申したこと、五人のお子方も、昨日の夕方、北山の船岡でお斬り申したこと、そして、四人の若殿たちも、唯今船岡でお斬り申したことを申しました。それから、乙若殿、形見、遺言などを傳へました。

北の方は、すべて、初めて聞くことでした。それは本當のことかと怪しまれました。餘りに思ひがけないので、夢のやうな氣もしました。しかし、怪しみは驚きとなり、驚きは悲しみとなつて來ますと、北の方は氣が遠くなつてしまひました。

暫くすると、北の方は氣に復りました。

「しよにその船岡とかいふところへ行つて、刑が裁されたならば、こんな悲しみはなからうに。」

さう云ひ續けて來て、北の方は復、氣が遠くなつてしまひました。

三

北の方は、そのまゝ死んでしまはれるではないかと見えましたが、やゝ暫くして、復正氣に復りました。

正氣に復ると北の方は、延景に向つて、
「是れから邸へ歸つても、誰を相手にする者もない。判官殿の斬られたところへ、私を連れて行つてくれ。せめて同じ所で死なせてくれ。」

と、云つて、延景が返事をしずみると、奥から走り出さうとしました。

延景は引きとめて、諫めて云ひました。

「お歎きは、御尤でございます。しかし、あなた様お一人だけではなく、今度の事では、然るべき方々が同じ歎きをして居らつしやいます。大殿、若君方のことをお思ひになります

すると、斬られてしまつたといふ四人の子供のことが第一に思はれて來まして、體は悲しんで一ぱいにされてしまひました。

北の方は泣きながら誰に云ふともなく云はれました。

「今朝八幡へ参詣したのも、判官（爲義）や子供の爲だ。氏神で入らせられるので、何うぞ無事にゐられるやうにと、お頼み申しに参詣したものを、皆が皆、殺されてしまつてゐるのではなかつた。こんなことになるのなら、参詣などするのではなかつた。しよにゐて、せめて最期のありさまを、一目でも見るのだつたに。」

北の方は愚痴になつて來ました。

「昨夜、子供たちが、皆して、私も私もと行きたがるので、やうやう睡して、今朝は皆寢てゐるうちに私だけ股け出して、いゝことをしたと思つたが、歸りには、邸へ着いたら皆して怒むだらう、何と云つて機嫌を取らうと、そんなことばかり思つてゐたところでした。八幡様はさぞをかしく思召したでせう。それにしても、せめて一人でも連れて行つたならば、その手だけは今まではしよにゐられたらう。いやいや、私も

上からは、お怒をお覺へに（思ひになること）なりまして、御一心に、跡々のお用ひを遣はすべきでございます。それが一番、亡くなられた方々の、後世の爲になります。それに生きてお出でになりますれば、亡くなられた方々をお思ひ出しになることも出來ますが、お死れになりましたは、何のかひもないことになります。」

「私もさう思はないでもないが、今日明日姿を變へたら、見る程の者が、あれは軍に負けた方の者だと目を附けるであらう。それだと、此方の名を云はないわけには行かない。云へば、爲義の妻が、かうだ、あゝだと人に云はれようが、それが恥づかしい。それに、人はいろ／＼の思ひをするものだ。たとへ尼になつても、年月が立つと自然心がゆるんで來て、年寄つた人を見ると、殿（爲義）も、生きて居たらはあの年だらうと思ひ、幼い者を見ると、自分の子供も生きてゐるとあれ位だらうと思つて、その後では、斬せた者が怨めしく、斬つた者も怨めしく思へて、念佛などは出來なからうと思ふので、いつそ死なうと思ふのです。」

北の方はさう云ひましたが、延景と、自分の附隨の女中と

が頻りに懇めますと、何と思つたか、
「それでは、せめて殿の斬られたといふ、七條朱雀へ行つて見よう。」

と、云ひ出しました。

自殺は思ひとまつたのだと、皆は喜びました。そして輿を舁かせて、七條朱雀へ行きました。

此所で斬られたといふところを見ましたが、北の方には、何の記念になるものも見えませんでした。

「ついでに、船岡へも行つて見よう。」

北の方は輿を船岡の方へ向はせました。桂河に渡つて北山へ向つて行く途を、五條の邊まで来ました。そこは河の岸が高く、流れも深く見えました。

「輿をとめろ。」

と、云つて北の方はとめさせて、下りました。

「ここで、石を積んで、回向をしよう。」

北の方はさう云つて、そこにある石を集めて塔を組みました。そして、殿と四人の子供の爲に回向をしました。それをしながらも北の方は、自分の袂や懐へ石を澤山に入れました。



た。

そして何気ない風をして云ひますには、

「殿のお斬られたとなつたところへ行つて見たが、お聲がするわけでもなく、目に見えるものがあるわけでもない。船岡へ行つて見ても同じだらう。行くのは見合せよう。その代り、私はここで、念佛を申します。私は永年のあひだ、毎日念佛を一萬遍つつ申してゐるが、今日は参詣の爲に出来なかつた。邸へ歸つて、子供たちの弄物を見などとすると、いろいろのことを思つて、心が亂れて申せないだらう。それで、此所で申すことにしよう。」

さう云つて、念佛をしてゐるやうに見せて、侍どもの油断するのを見て、岸から淵へ身を投げました。侍どもは驚いて直ちに河へ飛び込みましたが、袂や懐へ石を澤山に入れているので、深く沈んでしまつて、見出すことが出来ませんでした。

時が立つて下流の方から上げましたが、その時には死んでしまつてゐました。

北の方の身を投げた時に、附添つてゐた女中も續いて身を

投げて、やはり死んだのでした。

四

爲義の死骸は、京都の圓覺寺といふ寺へ葬つてありました。

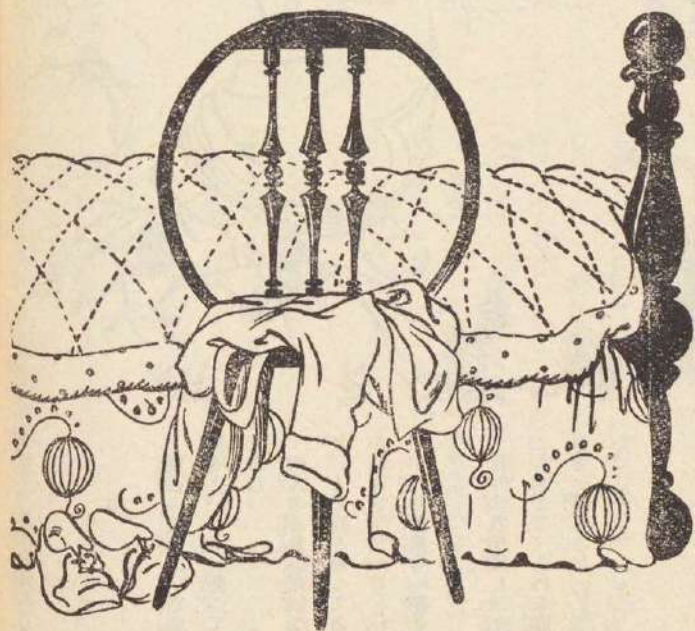
四人の若君の死骸は、如何にも父親を慕つてゐた、かはいさうだからといふので、同じ圓覺寺へ葬りました。

北の方の死骸も、火葬にしたあとで、これも同じ圓覺寺へ葬ることになりました。(なほり)

いい子

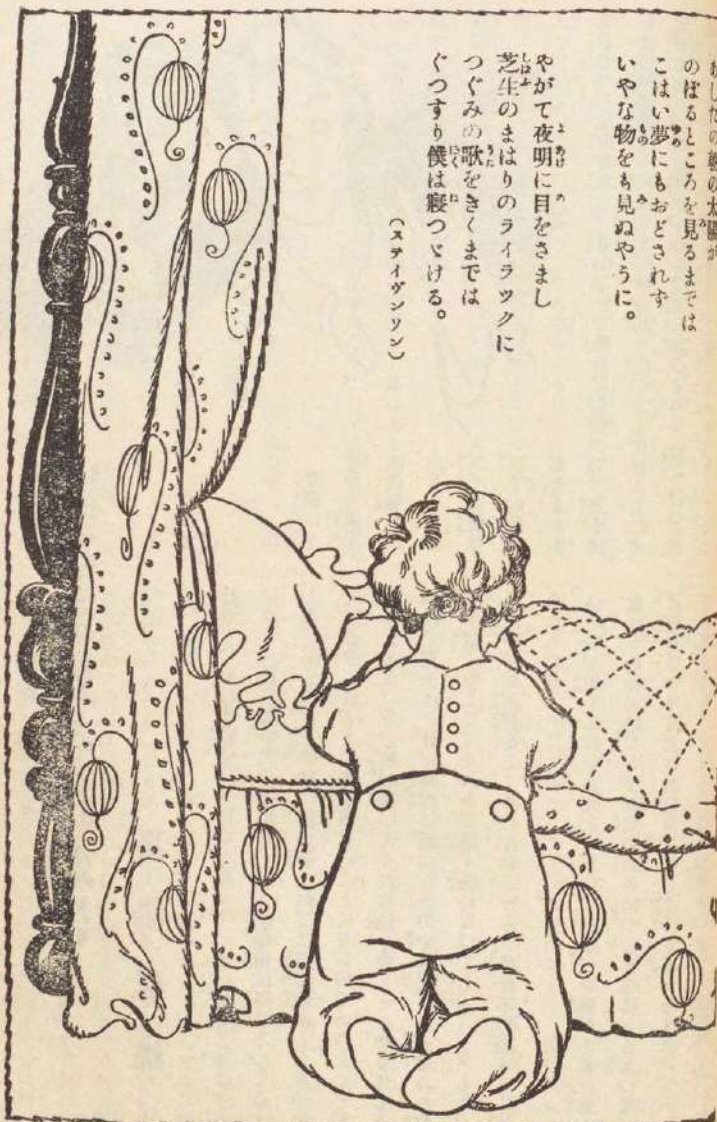
内藤豊雄

夜明け前から目をさまし
一日僕はうれしかった。
悪い言葉はつかはずに
にこ／＼笑つてよく遊んだ。
おてんと様は今やつと
森のうしろへ沈んでく。
僕はおとなしかったから
僕はほんとにうれしいな。
きれいなすべ／＼した布の
白い寝床が僕を待つ。
僕は寝なげりやなりません。
そしてお祈り忘れずに



あしたの朝の太陽が
のぼるところを見るまでは
こはい夢にもおどされず
いやな物をも見ぬやうに。
やがて夜明に目をさまし
芝生のまはりのライラックに
つぐみの歌をさくまでは
ぐつすり僕は寝つゞける。

(スタインソン)



罪なき娘を探ねに

馬場 孤蝶



「朝は早くから王子は仕事にかかりました。王子の娘は王子が思つたよりも

つとすつと自由自在に、草のなかで動きまわりました。で、王子はちぎりに飼糧槽に一杯になるだけ刈り取つてしまひました。王子はその刈つた草を持つて、家へ歸つて来て、既へ行つて、それを飼糧槽につめて置てから、二度目の分を刈りにと出て

行つて、それも瞬くひまに刈り取つて、既へ歸つて来ますといふと、實に驚いたことには、もう飼糧槽は空になつてゐました。そこで、王子は、成程これでは娘に教はらなかつたら、自分にはどうにも出来ないことになるのであつたことが解りました。で、娘が教へてくれた通りのことをやりだしました。王子は、好い按配に刈つた草の中に混り込んでゐた飼糧を抜き出して、それを手早く繩になつてしまひました。「倅や、お前何をしてるのかい？」と、馬が不思議さうに訊きました。

「いや、何でもないんだよ。なに、一寸、お前がこの上草を食はうといふのなら、お前の口を縛つてしまはうと思つて、鼻綱をなつてゐるだけなのさ」と、王子が答へました。白馬はそれを聞くと、深い溜息をつきました。そして、今

まで食つただけの分を齎することにしてしまひました。

王子は、それからすぐ既の掃除に取りかかりました。馬はこの若者にはとてもかなはないと思つて、全く往生してしまひました。それで、正午頃になつても、飼糧槽には草が一杯入つて居り、既の中はまるでなめ取りでもしたかのやうに綺麗になつてゐました。王子が仕事をやつとをばつた丁度その途端に、老爺さんが既を見にと入つて来たのですが、戸口で驚いて突つ立つてしまひました。

「こんなに善く仕事をする程の智慧がお前にあるのかね。それとも、誰かの智慧を借りたのかな？」と、老爺さんが訊きました。

「いえ、誰の智慧も借りるもんですか。私の頭でやつと考へついたことだけなんです。」と、王子は答へました。

老爺さんは顔をしかめて、行つてしまひました。王子は何も彼も盲く行つたのを非常に喜びました。

その晩、主人の老爺さんは、王子にかう云ひました。「明日は、別にお前に言ひつける仕事はない。けれども、娘が家の仕事で忙しいのだから、お前は娘の代りに牝牛の乳を

搾りなさい。だが、少しも癩らんやうにすつかり搾りきつてしまはなければいけないぞ。さうでないで、承知しないぞ。」王子は老爺さんの部屋を出ながら、心の内で「うん、何か仔細があるのになかつたら、この仕事もさう大した事ではないな。俺は、牛乳を搾つたことはいないけれども、俺の指先には力があるんだから、そんな事なんぞわけがあるものか。」と思ひました。

ひどく眠むかつたので、王子は直ぐ自分の部屋へ入らうと急いで行きますと、娘がまたそつとやつて来て、「明日の仕事は何ですか？」と、訊きました。

「貴女の手傳ひですよ。貴女の代りに、黒牝牛の乳を搾るだけ、後は何にも用はないんです。」と、王子は答へました。

「あら、本當にお氣の毒ね。あなた、それは大変な仕事ですよ。朝から夜まで引つきりなしに骨折つても、あの牝牛の乳が搾り切れるものですか。老爺さんにあなたが殺されずに済む方法といつてはたつた一つしきやありませんわ。それを教へてあげませう。それはね、かうすると宜いんです。乳を搾ります時にね、燃えてる石炭を入れた鉢と火箸を持つて行く

んです。それで、その鉢を牛舎の床へ置いて、火の中へ火箸を入れて、石炭が眞赤に燃え立つまで一生懸命に火をお吹きなさい。すると黒牝牛が、それは何にするんだと、訊くに違ひありませんわ。あなたはそこでかうお答えなさいよ。娘はさう云ひながら、足を爪だて、王子の耳へ何か叫びてから行つてしまひました。

翌日、東の空がやつと赤らみ始めるや否や、王子は寢床から飛び出して、片手には石炭の火を入れた鉢を持ち、片手には乳槽を提げて、牛舎へと入つて行つて、前の晩娘から教はつた通りにやりだしました。

黒牝牛は驚いた様子でじつとそれを見てゐましたが、やがて「いや、お前は何をしてるのかい？」と、尋ねました。

「いや、何でもありません。お前が私が欲しいと思ふだけの乳を出してくれなかつたら、お前に押つけてやらうと思つて、焼け火箸の支度をして置くだけなんだ。」と、王子は答へました。

牝牛は深い溜息をつき、その乳搾りの若者を恐さうに見ました。王子は委細構はずに、牛乳を一滴も残さずに、槽へと手早く搾り取つてしまひました。

翌その晩、王子が、翌日の仕事をきよにと、主人の老翁さんのところへ行きますといふと、老翁さんはかう云ひました。「牧場に小さい草塚があるんだが、それを持ち込んで来て干かさなければいけない。明日、お前は、それを納屋へ皆んな取り込むんだぞ、生命が惜しいんなら、極く小さい藁一本だつて後へ遺てゐないやうにしらうよ。」

王子は、これも大した事でないので、すつかり喜んでしまひました。

「小さい草塚を取り込む事なんぞ、わけのない事だ。彼の白馬に鞍かせるんだから、彼奴を思入れぶつ叩いて働かせてやるぞ。あの祖母奴容赦なくこき使つてやらう。」と、王子は思ひました。

やがてまた、娘がそつとやつて来て、明日の仕事は何だと訊きました。

王子は笑つて、云ひました。「私は順繰りに百姓の仕事をするのでありますが、草一本でも後へ遺してはいけないといふんです。明日一日の仕事は唯それだけです。」

丁度それが終つた途端に、老翁さんが牛舎へ入つて来て、牛の前に坐つて、乳を搾つてみたのですが、一つ滴も搾り出すことができませんでした。

「お前一人で何うしてこれができたんだ。それとも誰かに手傳つてもらつたのか？」と、老翁さんは怪訝な顔をしてゐました。

「いや、誰にも手傳つて貰ひなんぞはしませんよ。私の頭だけでやつたことです。」と、王子が答へますと、老翁さんはさも不機嫌さうな顔で、坐から立ち上つて行つてしまひました。



「あら、あなたは全くお氣の毒な方ですわねえ。何うして、それは大變な仕事なんです。世界ちうの人に皆な手傳つて貰つたとしても、あの小さい草塚をすつかり取り込む事は、一週間かゝつてさへ、とてもできることぢやありませんわ。一番上の干草を下すと、直ぐ下からそれだけが生えるやうに出来てしまふんですから、何時まで経つても、取り込みきれぬ氣遣ひはないんですよ。でも、私のいふやうになされば、



きつと、一遍に取り込むことができません。明日、曉明にそつと出て行つて、あの白馬と、丈夫な繩とを持つて、草塚のところへいらつしやいよ。それで、草塚の周囲に繩を掛けてその繩へ馬を繋いでお

しまひなさいよ。さうしていつてから、あなたは草塚の上へ登つてつて、一、二、三と勘定をします。すると、馬が何を勘定してゐるのかと、あなたに訊きます。そこであなたはいかうお答へなさいよ。」

で、娘はまた、王子の耳へ何事か叫びました。王子はその晩はもうそれで寢床へ入るより外仕方がありませんでした。王子はその儘ぐつすり睡込みましたが、翌朝は、まだ暗いうちに起きて、娘が教へてくれた通りの事をしにと取りかかりました。先づ最初、幾本かの丈夫な繩を擇り出し、それから、厩から白馬を引き出し、それに乗つて、草塚のあるところへと行きましたが、その草塚は馬車二十杯分はあるのでしたから、決して小さい草塚といふわけには行かないものなりました。王子は總て娘が教へてくれた通りにしてから、やがて、草塚の頂邊に坐つて、一、二、三と數へだして、直きに二十まで數へました。すると、馬が驚いて「倅や、お前何を數へてゐるのだね？」と、訊く聲が下から聞えました。

「いや、何でもありません。今面白くから、彼所の森の中に見えて、狼の群の數を數へてゐるんだがね、多量の何んのかのみでした。

「お前は本當にこれ程智慧があるのか。それとも、誰かに智慧を借して貰つたのか？」

と、老爺さんは云ひました。

「いや、私だけの智慧ですとも。」

と、王子が云ひますと、老爺さんは不思議さうに、頭を振りながら、行つてしまふました。

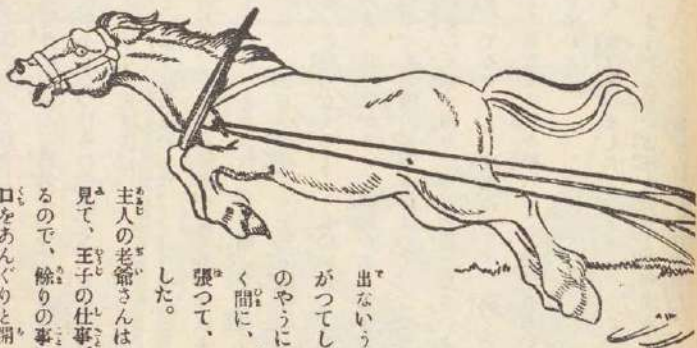
その晩遅くなつてから、王子が翌日の仕事を訊きにと、主人の老爺さんのところへ行きますと、老爺さんはかう云ひました。

「明日はな、白い顔の犢を牧場へつれて行くんだぞ。生命が惜しいんなら、きをつけて逃げられないようにしろよ。」

王子は何とも答へませんでした。心のうちでかう思ひました。

「いや、何んだこれは、何んな馬鹿な百姓でも、十九にもなつたら、犢の一群だつて引き受けてゐるんだ。一匹の番位何の事があるものかい。」

で、王子は自分の部屋の方へ、行きましたが、戸口のこ



つて、とても數へきれさうもないよ。」と、王子が云ひました。

「狼」といふ語が、王子の口から出るか出ないうちに、白馬は慄え上がつてしまつて、たちまち風のやうに駈けだしたので、瞬く間に、草塚を幾こぎ引つ張つて、納屋へ来てしまひました。

主人の老爺さんは、朝食の後で、来て見て、王子の仕事がすつかり終つてゐるので、餘りの事に吃驚して、少時は口をあんぐりと開いて、突つ立つてゐ

ろで娘が待つてゐました。

「明日は、何んな馬鹿にだつてできるやうな、タワイもない仕事を云ひつけられたんです。白い顔の犢を牧場へつれて行くだけなんですよ。」

と、王子は云ひました。

「あら、それは大變ですよ。あなたはよく、運の悪い方ですわねえ。あなたは、あの犢の足の速さつたら大變なもので、たつた一日で、世界ちうを三遍駆け廻ることが出来る位なのを、ご存じなくつて？ 私はいふことをよく聴いてらつしやいよ。此所にかういふ綱糸がありますからね、この綱糸でもつて、あの犢の前脚を縛らつて、こつちの端をね、あなたの左足の小指へ縛りつけてお置きなさいよ。つまり、あなたが歩いてゐようと、立てゐようと、臥てゐようと、あの犢が決してあなたの側を離れることができないようにする爲めなんですわよ。」

と、娘は教へました。

さういふ旨い方法を教へて貰つてから、王子は寢床に入つて、ぐつすり睡込んでしまひました。

翌朝になると、王子はすつかり娘が教へてくれた通りにしました。

犢に綱糸を縛りつけて、それで犢を引つ張つて、牧場へ行つたので、犢はまるで忠實な犬でもあつたかのやうに、少しも王子の傍を離れませんでした。

日暮方になると、王子はそれを無事につれて歸つて、牛舎の内へ入れましたが、やがて、其所へ主人の老爺さんがやつて来て、犢の歸つてゐるのを見て、顔をしかめて、かう云ひました。

「お前は本當にこれ程智慧のある男なのか。それとも、誰かに教へて貰つたのか？」

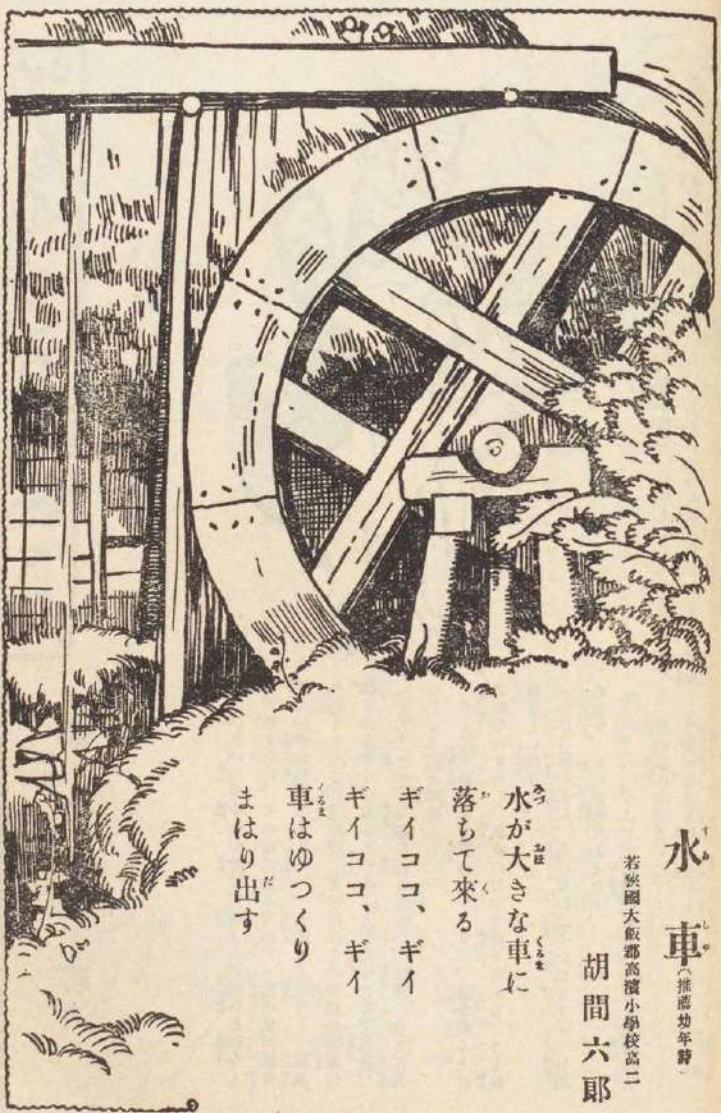
「いや、皆な、粗末ながら私のこの頭で考へてやつたことなんですよ。」

と、王子が答へましたが、老爺さんは、

「いや、俺はそれは信じないぞ。お前はきつと誰か智慧のある友達を見付けたに違ひないわい。」

と、嘘るやうに云つて、行つてしまひました。

(つづく)



水車

(推薦幼年詩)

若狭國大飯郡高濱小學校高二

胡間六郎

水が大きな車に
落ちて来る
ギイココ、ギイ
ギイココ、ギイ
車はゆつくり
まはり出す

子ボ
夜の遠行

ヨウブツのイサアサン。マントのトムサン。チヨウサ
チンモチのシゲルサンと三人が、あしたマヤカハへ
旅んそくするので、そのばんみんなトムサンのとこ
ろへとまつたが、なか／＼れられない。トム君「い
まからでかけようぢやないか。」さんせいさんせい。



みちで、サアがかきの木をみ
つけた。シゲルがシツケイしようと
いひだした。トムがでもどれがあ
まいかわからないぢやないか。ほ
くはチエがあるからわかると
エバツタ。



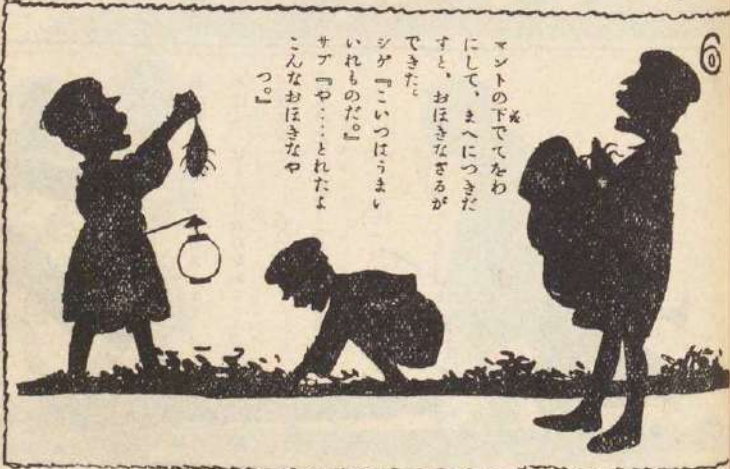
サア「きつと あまいのは
かりとれるか。」
シゲル「すしぐらゐるジヤくてもい
よ。」
トム「くひしんぼだな ほくがとつ
と／＼トムがのぼつた。そしてな
つてゐるやつを一ツ一ツしたからカ
シつてあまいのだけとつた。



4
サア「ならははトム君
チエが、あるとれしあ
まい。」
サア「どうし
てあまいか しぶい
かわかつた
らう。」
トム「どうだ
わがはいはチ
エがあるたら
う。」



5
こんどはシゲルくんが、い
もはたけをみつけた。
トム「かばらでや
さいもをこしら
へよう。」
さんせいさんせい
トム「ぼくがチ
エをだしてい
れものゐるこし
らへてやるか
らきみたちとりたまへ。」



6
マントの下でてをわ
にして、まへにつきた
すと、おほきなざるが
できた。
シゲル「こいつはうまい
いれものだ。」
サア「や、こゝとれたよ
こんなおほきなや
つ。」



「うん みる このさまな
どろぼうなんてするから
てんばってきめんだ。」

「つかまへたかへ。」

10



「さきまはどこのせいとだ、こつん。
かくかうのなをいへ、こつん。なんて
いふなまへだこつん。」

「こめなさい これからしません。」

11

「くせになるから、うんとこらし
ておやんなさい。」



シゲ「きみはチエがあるからうまく
のがれるとおもつてゐたよ。」
サア「きみチエをだせばいいのに、
だがひやくトやうはするぶんはやく
おきるもんだねー おどろいたよ。」

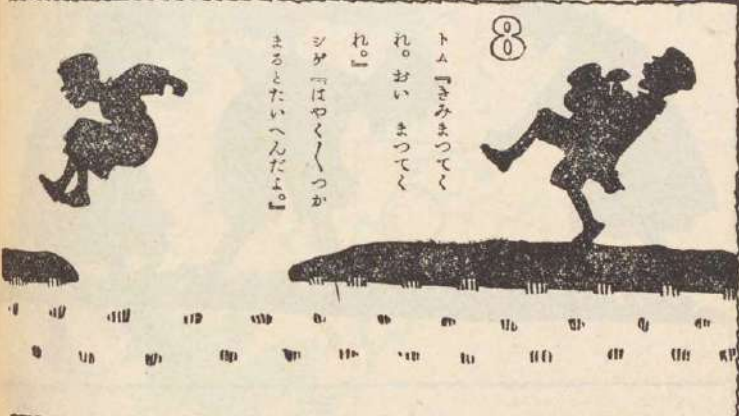
やうやく ぼのきんに にじゆつせ
んとられてかんべんしてもらつた。
トム「きみたちはひげふだれ
ア、……ン。」

12



こらッだれ
だ！
だれかきたぞ
にげろ〜
つかまると
たいへんだぞ

7



トム「きみまつてく
れ。おい まつてく
れ。」
シゲ「はやく〜つか
まるとたいへんだよ。」

8



おひやくしやう「こらッ まてど
ろぼう ひとのはたげをあらしてど
うするかまて こいつ。」
ぼちゃん わッ……ぶく〜

9



伯爵の娘

鈴木善太郎

たのです。そして今もお話した通り、あなたの養育費として三萬圓の金を伯爵様からあなたに上げて下さるやうに申込んだのです。伯爵様も今では御自分のなすつた事が悪かつたと思つてゐられるので、(それでは娘を連れて来い、さうすれば娘に三萬圓渡すから)とかうおつしやつたのです。」

「私はお前の親切はよくわかつてゐるの。お前のお父さんは以前お父様のところで爺やをしてゐたのね。そしてお母様が邸を出るやうになつた時、お母様の肩を持つてお父様の氣に入らない事を云つたといふので、お父様にお暇を出されてしまつたのだから、私眞實に氣の毒に思つてゐるのよ。その爺やの子のお前が又、こんなに私の爲めに盡しておくれたと思ふと、私ありがたくつて……」千代子はホロリと涙を零しました。

「ありがたいの何のつて、そんな事はどうでもいゝんです。さアすぐ御一緒に東京へいらして下さいませんか。」

「いゝえ、私歸らないの……私はお母様と二人で邸を出されてから、お母様が御懇意になすつていらしたこの善光寺の尼さんを頼つて信州に來たんですもの。そしてこゝでお母様がお亡くなりになつた後も、尼さんは私に大變親切にしてゐる

「千代子様、あなたはどうしても東京へはいらつしやらないんですか。」と、謙次はがっかりして云ひました。

「え、私もう東京へは歸らないの。」と千代子は云ひました。そして涙を含みました。

「でも私は折角こゝまで話をつけて來たんですからね……あなたのお父様の伯爵様は、あなたが生れると間もなく、罪もないあなたのお母様とあなたを、お邸から追ひ出しておしまひになりましたね。私はそれを考へると、伯爵様のなさり方が憎くてならないので、たうとう伯爵様とこへ謁見に行つて下さるんですもの……私もう一生こゝの尼さんとこにゐるわ。私お金なんぞ入りやしないし、又お父様に今更進ひたいとも思ひはしないわ。」

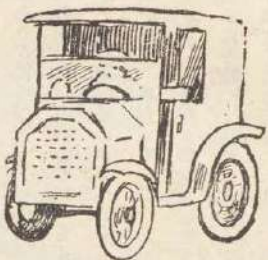
千代子の優しい聲がひつそりした尼寺の中に響きました。襖先に咲いてゐる櫻がヒラ／＼と散つて來ました。

謙次は自分の前に坐つてゐる千代子の美しい姿を見詰めるが、沁々可憫さうに思ひました。千代子は伯爵の令嬢として生れながら、生れると間もない時から十五になつた今日まで、この淋しい尼寺に引取られて、世の中の楽しい事も、面白い事も知らずに暮してゐるのです。

「然し千代子様私の父は亡くなる時、(信州にごさるお姫様には、私に代つてお前が忠義を盡さなければならぬぞ)と云て死んだのですから……私はあなたをこの儘にしてお置きます事は出來ないのです。」と謙次も涙含んで熱心に云ひました。

然し千代子はどうしても謙次のいふ事を肯かうとはしませんでした。謙次はたうとう諦めて尼寺を出ました。

長野の停車場に引き返しなから、謙次は全くがっかりしてゐました。彼は千代子に三萬圓の金を貰はせたい爲めに、わ



千代子の物にしてやりたく思ひました。

東京行の汽車が構内に入つて来ました。謙次は急いで汽車に乗りました。

「左様なら、千代子様！ 私はどうかして三萬圓のお金を戴いて来て上げますよ。」と謙次は窓の外に遙か遠く見える尼寺の高い屋根を眺めながら、口の中で云ひました。

二

汽車が碓氷峠にかゝつた頃は、乗つてゐる人々は皆眠つてゐました。然し謙次ばかりは眠られませんでした。どうして伯爵から三萬圓を貰はうか……謙次はその事ばかり考へなが

……下度十五になりましたがね……」
その中に汽車は高崎に着きました。爺さんは謙次に挨拶して急いで出て行きました。

年が十五で美人！ と謙次は心の中で叫びました。もしその娘を千代子の身代りとして伯爵の處へ連れて行けるなら、三萬圓の金はうまく貰へさうに思はれました。伯爵は千代子の顔も全く知らないのだから、年頃が合つてゐて、そして美しくさへあれば、伯爵を誤摩化す事は何でもないのであります。

汽車が上野に着いた時、謙次はすぐ神田連雀町の二葉屋をさして、態と自動車を飛ばして行きました。

「二葉屋はこちらですか。」と謙次は今丁度店先から出て来た田舎風の娘に訊きました。

「さうです。」と娘は答へました。

「では信州から來てゐるお隅さんといふ人がゐますかね。」

「私隅だけんど、お前さん誰だね。」

「あなたがあのお隅さん？」と謙次は驚いて云ひました。成る程年は十五位でせう。然し美人などとは思ひも寄らぬ

ら、天井裏に點いてゐる薄暗い電燈をほんやりと見詰めてゐました。

突然謙次の肩が重くなつて來ました。振り返つて見ると、すぐ隣に坐つてゐる二人の爺さんが居睡りをしながら、そのガク／＼と揺る首を、謙次の肩に凭らせてゐるのでした。

「さう寄りかゝつちや重いね。」と謙次は歎鳴りました。そしていきなり爺さんを揺ぶりました。

「ア、ア……」と爺さんは呻るやうに云つて、今までつぶつてゐた眼をバチリとあげました。

「何處まで行きなさんですか？ そんなに寝込んで乗り過しちやいけませんよ。」と謙次は云ひました。

「わしは高崎まで行くですがね。」と爺さんは云ひました。「時に神田連雀町に二葉屋といふ口入屋があるさうですがね。」

「それが何ですか……」

「實はわしの娘が今そこゐますでね……そこで女中奉公の口を探してゐるさうですが、もううまく見附かつたかどうか……と思ひましてわしは長野から三里ばかりある村の者がですが、娘のお隅は村ではまア評判の美人の方でした……」



事でした。第一、その片方の眼は潰れてゐ、鼻は顔の真中に大きな胡坐をかいて、又その額は眼の上に小山のやうに飛び出してゐました。

「私は横田伯爵家の使です。あなたに大金をお上しようと思つて來たのです。」と謙次は道々考へて來た事を云ひました。

「お金を？ どの位？」

「三萬圓！」

「そんなに澤山？ ほんたうかね？」

「ほんたうですとも、さア自動車に乗つて下さい。尙恐しい話を道々しますから。」

「でもおら今から高輪のお邸に小間使のお目見得に行く事になつてゐるでね……」

「まあ考へて御覽なさい。小間使に行つて幾ら貰はれるか知れないが、今あなたは三萬圓の金持になれる處ですよ。さア早く一緒に自動車に乗つて邸へ参りませう。」

謙次は無理にお隅を一緒に乗せて、駒込の横田伯爵邸をさして自動車を走らせました。

「ほんたうかね。」とお隅は自動車の中で謙次に訊きました。

「おらほんたうに三萬圓貰へるのかね……」

お隅は勿論何かの間違であらうと思ひました。然しほんたうにそんな大金が貰へるなら、間違でも何でも構はないと思ひました。

「實はあなたのお母様は園子様とおつしやる方なんです。そしてあなたは千代子様とおつしやつて、伯爵のお姫様なんです。」と謙次は熱心に云ひました。

お姫様といふ言葉は、お隅をすつかり喜ばせました。自分はまだもう高輪の邸に行つて、月に五六圓の金を貰ふ爲めに、朝から晩までこき使はれなくともいふのだ、三萬圓！伯爵の

て立つてゐました。

「お掛け下さい、お姫様。こちらがあなたのお父様のお邸なのでございませよ。只今お父様の伯爵様がお逢ひ下さいますでせう。先刻も申上げた通り、お姫様のお名は千代子様で、お母様のお名は園子とおつしやるんです……それをお忘れ遊ばしてはなりませんよ。」

謙次は馬鹿丁寧な言葉で云つて、それからうやくしく頭を下げました。

ほんたうに私は伯爵のお姫様なんだつけ！とお隅は氣が附きました。そして伯爵のお姫様はこんなにキョトくと邊りを見廻してはならないのだと思ひましたから、いかにも立派な令嬢であるやうに様子振つて、それから芝居で見た伯爵の娘の聲色を真似て云ひました。

「え、わかつてゐてよ。心配する事はない事よ……」

お隅はさう云つて應揚に頷きながら、椅子に腰を下ろしました。するとお隅の大きな腰の重味の爲めにその柔かに膨れ上つてゐる椅子が忽ちペタンコに凹み、そのはづみにお隅の身體はドンと跳ね返されました。お隅はもう少しで椅子から投

娘！お隅は夢のやうな心持の中で、いつか芝居で見た事のある伯爵の娘がいかにも氣品高く、應揚で、美しくかつた事を思ひ出しました。自分は今までのやうに軽々しく振舞つてはならないのだと思ひました。

三

駒込の横田伯爵邸の玄関に、自動車が横附にされると、書生が慌て、飛んで出て來ました。

書生は謙次が立派な自動車に乗つて來たのを見ると、相應な身分のある少年だと思ひ込んで、すぐ謙次とお隅を玄関の側の應接間に導きました。

「暫らくこちらでお待ちを願ひます。」と書生は復腰を低くして一禮して去りました。

お隅はこの邸の何處も彼處も立派なのに驚きました。見限りの物はピカ／＼と輝いてゐるやうでした。信州の山の中から東京に出て來て、まだ十日とも経たぬこの田舎娘には、どれもこれも驚きの種でないものはありませんでした。お隅は皿のやうにした眼の玉をキョロつかせながら、うろ／＼し

け出されさうになつて、ハツと思ひましたが、やつとの事で椅子の眩惑にしがみ附きました。そしてかういふ椅子にはもう何十年前前から腰を掛けて育つて來たやうな顔をして、

「エヘン！」と黄色い聲で咳拂ひをしました。突然、玄関の方から人聲が聞えて來ました。謙次は入口の扉を細目に開けて見ました。横田伯爵は今しも書生や女中達に送られて玄関に表はれました。そしてその前には一臺の自動車に伯爵を待つてゐました。伯爵は今何處へか出て行くのだ！と謙次は思ひました。謙次はすぐ應接間を飛び出して行きました。

「御前様！」と謙次は呼び掛けて、伯爵の前に進み出ました。伯爵は一寸ギョツとして、謙次を振り返りました。

「御前様！」と謙次は伯爵の前に立ちふるがつて叫びました。「今日はお姫様の千代子様をお連れして参りました。豫て御願ひ申して置きました通り、三萬圓を千代子様にお渡し願ひます。」

その時執事の橋口が、袴の裾をカサ／＼と音立てながら馳けて來ました。



「君！ 御前様のお出まし先を邪魔しちゃいけない！ 御前様はこれから小田原へ行らつしやるんだ。そしてもう汽車の時間が来てゐるんだ……」

「いや、兎に角千代子様にお約束の三萬圓をお渡し願ひませう。さもない中は御前様をこゝから一足も去らせませんよ！」

と謙次は焦立つて眞顔になつて叫びました。そこに並んでゐた書生や、女中達は驚いてザワめき出しました。

お隅は謙次が開け放して行つた扉の隙間から、

式風の袴をじつと覗いてゐました。

樋口執事は伯爵の側へ寄つて云ひました。

「いつそお姫様をお邸でお引取りになつてはいいかゞでございませう……その方が面倒がなくて宜しいかと存じますか。」

「君の方は夫で異存はないか。」と伯爵は謙次に云ひました。

「尤も邸で娘を引取る以上は、約束の三萬圓を渡す事は出来んのだが……」

「それでは話が違ふだ……」

いつか應接間の戸口から半身を出して聞いてゐたお隅が、その時叫びました。

人々は驚いてお隅の方を振り返りました。

「あれは誰だ？」と伯爵は云ひました。

「千代子様です。」と謙次は答へました。それからお隅を手招きしました。

お隅は何だか極りが悪くなつたので、應接間の中に馳け込まうとしましたが、こゝは大事な場合だと思ひ返しました。三萬圓の金を手にするの、しないの、たゞこの場合の度胸一つなのだと思ひました。

お隅は芝居で見た伯爵の娘が刺き振りを引思ひ出してゐました。お隅はいかにも淑やかな、上品な足取りで、それから飽くまで氣取つて、徐々と玄關に出て來ました。

「こゝ、これは誰だ？」

伯爵は呆れて謙次に云ひました。まさかこの田舎娘が自分の娘の千代子だとは、どうしても思へなかつたのです。

「千代子様です。」謙次は繰返して云ひました。

四

「これが千代子だつて……」

伯爵は開いた口がふさがりませんでした。その片目の醜い小娘がわが子なのかと思ふと、伯爵は驚きの餘り震へ出しました。

書生や女中等はじろく／＼とお隅を見、そして私語き合ひました。

「御前様、お邸で御養育なさる事は、お止めになつた方が宜しうございませう。」と樋口執事はがっかりして云ひました。伯爵も元よりさう考へました。たとへわがほんたうの娘で



あつたとしても、その片目の醜い田舎娘を邸に引取つて養育しようとは、到底考へられませんでした。自分はこの娘の父親なのかと思つただけでも、伯爵は恥かしさの爲めに赧くなりました。

「私千代子でありますの……」

お隅は新派芝居で見た伯爵の娘の聲色を真似ながら、少し氣取つた様子を、その大き過ぎる口を出来る丈に細めて云ひました。

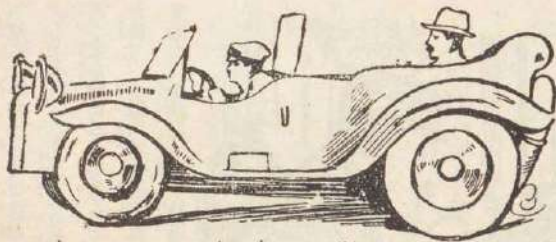
「そして……私のお母ちゃん……いや、あのお母様は……」

お隅はふと謙次に教へられたその名を忘れて、先きが出なくなりました。お隅は蛙が大きな蛇でも呑み込んだ時のやうに目の玉を白黒にしながら謙次の方を振り返りました。

「園子……」と謙次は私語しました。

「あの私のお母様はとの子でありますの……」

「さふ……園子だ……」と謙次は氣を振んで私語しました。



お隅は繰り返して云ひました。

「お情深いお父様の伯爵様が、あなたに三萬圓下さるといふ事を私からお聞きになった時、あなたはどんなにお喜びでございましたか？」

謙次はもう一度云ひました。

「お情深いお父様の伯爵様が、私三萬圓下さるといふ事をお前からお聞きに……いや、聞いた時、私はどなんに喜んだらうねえ。」

お隅は棒讀みの調子で繰り返しました。お隅は芝居がりの調子を、こゝまで持ち堪へて来る事はもう出来なかつたのです。お隅は「なりへトく」になつてゐました。

「そして……」と、謙次は云ひました。

「そして……」とお隅は繰り返しました。

「いや、違つた……あの園子でありますの……あなたは又つア……いや、お父様でございますか。お懐しうございますわねえ……」

お隅は手を握けていきなり伯爵に抱き附きました。

「こ、これ！ な、何をするかッ……」

伯爵は面喰つて叫びました。

女中達は驚いてアツと叫びました。

「ほんたうにお姫様は、久しい前からお父様にお眼にかゝりたいと云つてゐらつしやいましたね。」

謙次はお隅に云ひました。

「え……私は久しい前からお父様にお眼にかゝりたいと云つてゐたわねえ。」

お隅は鸚鵡返しに云ひました。

「お母様の園子様がお亡くなり遊ばしてから、あなたは信州の山の中で、毎日泣いてお暮しになりましたね。」

謙次は再び云ひました。

「え……お母様の園子様がお亡くなり遊ばしてから、私は新田の……いや、信州の山の中で、毎日泣いて暮してゐたわ……」

その時、横田伯爵は運転手に「チラと目配せしました。運転手はすぐ覺つて自動車の扉を開きました。伯爵は突然飛び乗りました。伯爵はもう自分がこの娘の父親だと思ふ丈でも極りが悪くなつて、そこにゐる事が出来なかつたのです。

「御前様！」と叫びながら、謙次は矢庭に伯爵を追ひかけました。

「お父様！」と云ひながらお隅も續いて庭に飛出して來ました。

然し自動車はその時スウと滑るやうに走り出しました。そして見る間に門を出て行つてしまひました。その後には、二人を嘲笑ふやうなガソリンの匂が空しく漂つてゐました。

「早く、今の自動車を追跡してくれ給へ！」と謙次は自分が先程乗つて來た自動車の前に馳けて行つて、運転手に命じました。お隅も馳けて來て謙次に手を取られながら飛び乗りました。

謙次とお隅の二人を乗せた自動車は、伯爵の自動車の後を追ふて東京驛に向ひました。

残念な事には謙次の自動車は安物の貸自動車でありましたから、どうしても伯爵の自動車程には速力が出ませんでした。漸く東京驛に着いて見ると、もう伯爵は汽車に乗ってしまった後で、小田原行の汽車は、今汽笛を鳴らして滑り出した處でした。謙次は地駄ン駄踏んで口惜しがりました。

「運轉手君！ すぐ新橋まで全速力で走ってくれ給へ！ 金は幾らでもやる！」と謙次は叫びました。

五



自動車は新橋に着きました。謙次は運轉手「賃金を拂つてお隅を連れて自動車を出しました。それから切符賣場に馳け込んで小田原までの切符を二枚求めると、お隅の手を引張つて急がせながら改札口を出て行きました。階段を上つて高いホームに出ると丁度、今汽車が着いた處です。人々は押し合ひながら汽車に乗り込まうとしてゐました。

「さア早くこれに乗りませう！」と謙次は尙もお隅の手を引張つて云ひました。お隅は何だか急に恐ろしくなつて來ました。今伯爵の邸で一生懸命に芝居かかりの聲色を使つて見たけれども、三萬圓

は思ひ懸一欠も貰へませんでした。こんな窮乏なら充足り高麗

邸に小間使に行つて、地道に月々の給金を蓄めるやうにした方がよかつたと腹立しく思ひました。そしてこの男の云ふ事を黙つて聞いてゐると、今度は汽車に乗せて、何處か知れない遠い／＼處へ連れて行かれるのだと氣味悪く思ひました。

「この嘘ツ吐き！ 三萬圓貰へるなんて嘘だんべ！ おらもう二葉屋へ歸るだよ！」

お隅は蟹のやうにその口から泡を吐いて嗚鳴りました。

「さア一緒に汽車に乗りませう。今こゝでお金が貰へるんですから！」と謙次は復念き立て、云ひました。

「厭だ／＼！ おらんこと何處へか連れて行くんだらう！ 嘘ツ吐き！ 馬鹿野郎！」

お隅は頭を振つて嗚鳴りました。そして急に聲を上げて泣き出しました。

「もし、もし……！」と巡査が何處からか出て來て叫びました。謙次はギョツとして、思はずお隅の手を振り放すと、その儘汽車の中に逃げるやうに馳け込みました。するとお隅は一瞬も早くこの場を立ち去らうとして、階段を下りて出口の方

へ走つて行きました。

「もし、もし……！」と巡査は尙叫びながら謙次の後を追つて來ました。謙次は逃げ場を失つて、洗面所の中に飛び込みました。巡査はその後から汽車の中に入りました。巡査は洗面所の扉を叩いて嗚鳴りました。

「おい、開けろ！ 開けろ！」

洗面所は丁度二等車の續きでありましたから、そこに乗つてゐた横田伯爵は最初からこの様子を見てゐました。そして心の中で心配してゐました。もし謙次が巡査に訊問されれば、自然千代子に對して自分がどういふ所置をして來たか、世間に知れる道理です。こゝは何とかして巡査を早く返し、又かねて約束の金は謙次に渡してしまはうと思ひました。

「君！ その中にはわしの書生が入つてゐる筈だ。君は何かわしの書生に用でもあるかね。」

伯爵は巡査の前に立つて來て、「貴族院議員、伯爵、横田實」と印刷した名刺を巡査の前に突き付けました。その時汽笛が鳴つて、汽車が滑り出しました。

「これは失禮いたしました！」と巡査は慌て、一禮して汽車

を飛降りて行きました。

「汽車はやがて芝浦の海岸にかゝりました。

「もういゝから出ていゝよ。」と伯爵は扉の外で叫びました。洗面所の扉は始めて開けられました。そして謙次がその中から出て来ました。

「君！ わしは小田原行を急いだので、つひ君にとんだ御足勢をかけた。娘の事で君にはいらく心配をかけた。では約束通り三萬圓やるから、娘にこれを渡してくれ給へ。」

伯爵は三萬圓の小切手を出して謙次の手に渡しました。「それは有難うございました。それでは私は品川で下車しますから。」と謙次は金を受取つてホツとしながら云ました。

「わしは悪かつた。わしは娘に對して何一つ父らしい事しなかつた。然しこれ丈があれば、娘の教育費があるだらうから萬事宜しく君に頼む。」と伯爵は面目なげに云ひました。

する中に汽車は品川に着きました。謙次は伯爵に挨拶をして別れました。謙次はすぐ自動車を買つて上野停車場に引返しました。謙次は一時も早くその金を信州の山の中にある不幸な千代子の手に渡さうと思ひながら。

「私がこれだけの勢をするのは當り前です。今日こそ父も草葉の蔭で喜んでゐてくれませう。」

「私のお母様もどんなにか草葉の蔭で、有りがたく思つてゐるでせう。けれど、私はどうしてもこのお金は戴く譯には行かないわ。お前にはほんたうに濟まないけれど……」

千代子はその小切手を押し戻しました。謙次は全く當惑しました。折角あれまでの苦心をして伯爵から受取つて来たこの金を、どうにか千代子に取つて貰はなければならぬと思ひました。謙次は口入屋の二葉屋から百姓の娘のお隅を連れ出した話までして聞かせました。

「まアそのお隅さんにはとんだお氣の毒をしたわね。ではこの金はそのお隅さんに上でおくれ。」と千代子は云ひました。

「そんな馬鹿な話はありません。」と謙次は驚いて云ひました。「御免下さい」と云つて、そこへ一人の紳士が入つて来ました。それは伯爵の邸から来た橋口執事でありました。

「お姫様の千代子様はお出でになりませうか。實は御前様がいろ／＼お考へになつた末、どんな不機嫌なお姫様でも、お邸にお引取りになつて御養育遊ばすといふ御決心をなさいま

六

謙次を乗せた汽車は長野に着きました。謙次はすぐ善光寺の尼寺へ急いで行きました。

「謙次、私はもうどんなにお前が云つておくれでも、東京へは歸らないつもりなのよ……」と千代子は出て来て謙次を見ると云ひました。

「いゝえ、千代子様、今日はあなたを東京へお連れする爲めに何つたのではありません……私は伯爵様から三萬圓のお金をあなたの爲めに戴いて参りました。これをお上げする爲めに参つたのです。」

謙次は三萬圓の小切手を出して千代子の前に置きました。「まア……」と千代子はそれを見て叫びました。そして突然泣き出しました。

「どうしてあなたは泣きになるんです。」

「でもお前は私のやうな者をそんなに思つておくれなんですもの……」と千代子は泣きながら云ひました。

「此間も申上げました通り、それは私の父の遺言ですから……したので私がお返しに戴りました。」と橋口執事が云ひました。執事は眼の前の千代子を、ほんたうの千代子だとは思はなかつたのです。

「はい、そのお姫様は只今神田連雀町の二葉屋といふ口入屋にお隅といふ名前であらしてお出でになります。お姫様も幾らかお喜びになりますから、どうぞそちらへお出で下さいまし。」と千代子は云ひました。

「な……何です……」と謙次は又驚いて云ひました。千代子は謙次に黙つてゐておくれといふ眼附をしました。橋口執事はすぐにその二葉屋に行つて、お隅を連れて行く爲めに東京へ歸つて行きました。

「千代子様、あんな百姓の娘をどうしてあなたの身代りになるのです？」と謙次はムキになつて云ひました。

「でもお隅さんは伯爵の娘になりましたが、つしやるんだから、それがお隅さんの爲めに幸せでせう。私にはこの尼寺で一生を暮らす事が私の幸せなんだから……どうぞこの三萬圓も新しい伯爵のお姫様にかけておくれ。」

千代子はいかにも決心したやうなハッキリした聲で云ひました。櫻が復ヒラ／＼と襟先にこぼれて来ました。(をばり)



果して救へられた教育がありました。マルコーは胸がどきどきしました。
 戸を叩くと、年をとつた女の人が燧火を手に持つて出て来ました。そこで、マルコーがメキネーさんの家は何處ですかと尋ねると、女の方は急に迷惑さうな顔になつて、
 『おや、お前さんもメキネーさんを尋ねて来たのかい。もういゝ加減にしてもらひたいものだ。新聞に廣告までしたのに、矢張り尋ねて来るんだ。これではやり切れないから、今度は町の角へでも、メキネーさんはツークリーマンといふ町へ引越した』とビヤに書いて出して置かうか』と、さも面倒臭さうにいひました。

あゝ、マルコーのお母さんは、たうとう此の町にもゐなかつたのでした。ツークリーマンの町へ行つたといふ。しかし、その町はこゝから三百里も先きののでした。こんどこそはと思つたのに、これから三百里も行かなければならないと聞いた時、マルコーはがっかりして氣を失つたやうになつて、ばつたり地面に倒れてしまひました。

「この車はツークリーマンの町までは行かないのだ。サンチャゴといふ處へ行くのだから、途中までしか連れて行く事が出来ない。それから先きは強い一人旅で歩かなければならないし、それに牛を遣つて行く筈だから、大丈夫二十日はかゝる。それに途中は随分つらい事があるぞ。』

と、おどすやうにいひました。
 『構ひません。お母さんに遇へることなら、僕はどんな事でも辛抱します。』
 かう叫ぶやうにいつたマルコーの聲が、いかにも一生けんめいだつたので、たうとう親方も承知して、
 『それなら今夜は、この車の上で寝な。明日の四時に起してやるからな』と打つけていひました。

夜明け方の四時、まだお星様が光つてゐる空の下で、旅商人は出発しました。マルコー

ので、まつきとは別人のやうに、目に涙さへ浮べてゐましたが、やがての事はたとと手な拍つて、
 『あゝ、さうだ、いゝ事がある。この町を下つて右へ行くと廣場があるから、そこへ行つて明日荷物や牛をひいてツークリーマンの町へ立つ旅商人に頼みなさい。さうして一緒に連れて行つてもらふのです。何か仕事の手傳ひでもしたら、きつと荷車の上ののせて行つてくれるでせう。これから直ぐ行つて御覽なさい。』かういつて女の方は、親切に教へてくれました。

マルコーは幾度かお膝をいつて、轉るやうに出て行きました。
 救へられた廣場へ行くと、成程大ぜいの人が、がや／＼いつて大きな荷車に鞍物の袋をつみ込んだり、牛に草をやつたりしてゐました。その中で一人、大きな長靴をはいた背の高い男が大聲で切りと指圖をしてゐます。マルコーはこの男が親方だと思ひましたから、恐る／＼傍へ行つて、圖を話して『どうにかして連れて行つて下さい。その代りに持つてゐる十五圓のお金もあげます。』

「お前さん、お前さん、連れて行かす。親方に死にかけてゐます。最後で死んで棄てられても誰も知る者もないのです。」
 マルコーは熱に浮かされて叫んでゐました。この中でも流石に親方だけはマルコーをいたはつて、よく圖面を見にくれました。お蔭でマルコーの病氣も次第によくなつて来ました。しかし、すつかり治つた時には皆なと別れなければならぬ日でした。丁度コルドバの町を出てから二週間目でした。マルコーがこれから行かうといふツークリーマンの町と、旅商人が行くアンチャゴの町とは、こゝで道が分れるのです。

親方はいゝ／＼お別れだといつて、マルコーにこれから先きの事をいゝ／＼注意して、食物を深山入れた袋をマルコーの肩へ自分で結びつけてくれたりしました。他の者も今迄は随分マルコーをひどい目にあはせましたが、いゝ／＼別れて行くのかと思ふと可哀さうになつて、別れを惜しむやうに手をあげながら遠ざかつて行きました。
 マルコーも其處にべつたり坐つたまゝ、皆なが赤い砂塵をあげて段々小さくなつて、遠

さがつて行くのを見送つてゐました。

マルコーは皆なと別れた最初の日は、足のつゞく限り歩きました。そして、その晩は樹の下に寝ました。次の日はすっかり元気がなくなつて、靴は破れるし、足は痛むし、おまけに食物が悪いので胃も悪くなりました。夜になると、人っ子一人ぬいので氣味が悪くて、伊太利にみた頃よく話に聞かされた大きな蛇の事などを思出し、今にも寝てゐる上へ旬ひ上つて来るやうな氣がして、ひよいと飛上つて歩き出すこともありましたが、しかし、歩いてゐると、何ともいへなく寂しくなつて暗闇の中でしく／＼泣き出しました。

「あゝ、こんなに僕がこぼがつてゐる事をお母さんが知つたら、どんなに心配なさるだらう。」さう思ふと、また勇氣が出て來ました。

そこで、マルコーはこぼくになると、きつとお母さんの事を考へるやうにしました。お母さんが家を出て行く時、いひ残して行つた言葉や、小さな時分病氣で寝てゐると、心配さうな顔をして自分を覗きこみながら始終しつかり抱いてくれた事などを考へ／＼しました。マルコーはいろいろの思ひ出にふけりながら



を離れて、三千里の遠い國まで來て、一生けんめい働いた。たうとう重病氣にかゝつて、今にも死なうとしてゐるのです。

見られない林の中を通つたり、大きな砂糖黍の畑を抜けた。また果てしのない野原の中を歩いて行つたりしました。しかし、四日、五日、六日、七日、――と歩いて行くうちに體はすん／＼悪くなつて、足からは絶えず血が流れてゐました。或る日の夕方、

「ツイーグマンの町は、これから二十里です。」と、いつてくれた人がありました。マルコーは思はず「あゝ、うれしい。」と、叫びました。急に元氣が出て來たやうに思ひました。しかし、元氣だけは直つても體はいふ事をききません。却つて急に疲れが出たやうで、ふら／＼と路傍の溝のなかに倒れてしまひました。けれども、マルコーは暗れ／＼といふ氣持ちになつてゐました。

頭の上には金の砂をまいたやうに、お星様さがら／＼と光つてゐました。マルコーは生れてからこの時ほど、空を羨しいと思つた事はありませんでした。ちつと空を見てゐるとひとりだに涙が出ました。マルコーはうれしくつて堪らなく思ひながら體を伸ばして草の上で眠らうと思つた。すると、どこかでお母さんが自分の足を見てもゐるやうな氣がするのです。

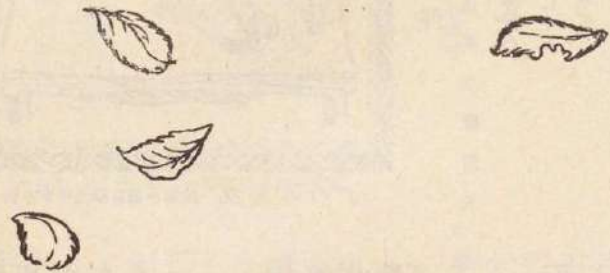
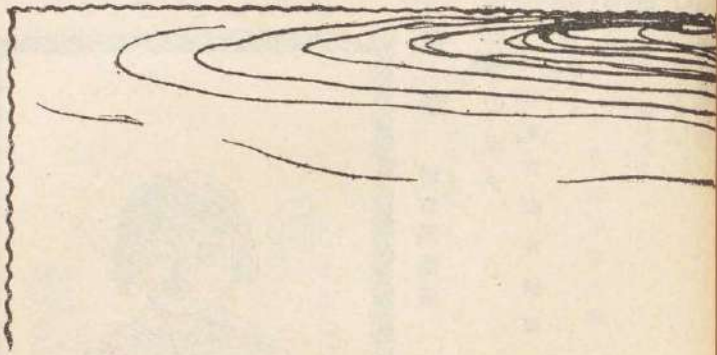
「あゝ、あゝ、こんな遠い處でたつた一人で誰の顔も見ないで死んだ。あゝ、マルコー。あゝ、あの可哀さうなマルコーは今頃何處にゐるのだらう。可哀さうに、可哀さうに。」と病人は溜息をついてゐました。すると、その時、奥様があわてゝ病室に入つて來たのです。奥様は少しふるへた聲で病人にひひました。「お前にいふ話を聞かせに來たのだよ。大變にうれい話なんだよ。それは思ひがけない人が來たんだよ。奥様はこんな事を切れ／＼にいひました。病人はちれつたさうに、
「誰です。誰の事です。」と、いほうとしました。が、その時思はず、
「あッー」と叫んで、まるで幽霊でも見たやうに目を見張りました。

七二

「あゝ、お母さん、あなたは今何處にあるのです。今頃何をしてゐるのでせう。あなたの子供たちの事を考へてゐるのでせうか。こんなあなたに近づく來てゐるマルコーの事を考へてゐて下さるでせうか。」
かういつてマルコーが獨言をいつて喜んでゐた丁度その時、マルコーのお母さんは、ツイーグマンの町から五里程はなれた處のメキネー家の一間で、重い病氣にかゝつて寝てゐたのでした。それほどでもない外科の手術を受けなければ治らない病氣なので、親切な御主人夫婦は病人の枕元へ來て、いろ／＼優しくいつて、手術を受けるやうに勧めてゐたのでした。けれども、お母さんの方では長い病氣ばかりでなく、久しい間本國の夫や子供たちから何の便りもないので、それにすつかり力を落して、今更外科の手術を受けて助かつた處が、生き甲斐のない體だから何事も運命にまかせて、いつても死んで行く／＼覺悟をきめてゐました。

本當にマルコーのお母さんは、可哀さうな人だ。自分の家歸るために願ひをこめて、願まかれになつて、お醫者様に片手をとりながら病室に入つて來たのでした。
「神様、神様、あゝ――」病人は夢中で叫んで、疲せ細つた腕をひろげて、マルコーを胸の上に抱きしめました。そして、急に氣狂のやうに笑ひました。それから今度は、おいおいと泣きました。しまひには呼吸をつまらせて、枕の上になつたり倒れてしまひました。

さて、マルコーのお母さんは、あれ種手術を受けないとがんはつたのに、たうとう醫者のすゝめに従つて外科の手術を受けました。もう二度と再びあへないと思つてゐたマルコーに、思ひがけなく遮へたので、もつと／＼生きてゐたいといふ望みが出たからでした。お醫者様は手術をすますと、病室から出て來て、その時廊屋の外に心配しきつて死んだ者のやうになつて倒れてゐたマルコーを抱き起しました。そして、日に眞黒くやつたマルコーの頭をなでながら、「お母さんは大丈夫治るよ。お母さんを助けたのはお前だ。お前は本當に偉い子だ。」といひました。(をばり)



渚の 芒の
葉が
枯れた
山から
西吹く
風が吹く
海から
山吹く
風が吹く



山から
海から
秋が来た
河原の楊の
葉が
枯れた

西吹く風

野口雨情

(賞) しんはご 畫由自



よつみ 木高 校學小屬附學大子女本日

童謡

野口雨情選

欠伸

熊本 小野哲夫

隣のボチ

東京 松井淡翠

朝顔と蕪

東京 山本白鳥

坊やも嬢やも
氣をおつけ
隣のワンワはわるワンワ
子供が通ると
出て見ると

欠伸賣ろ 欠伸賣ろ
欠伸買つて何にする
泣く兒に吞ませて
眠らせる

夕やけ
神戸 三好眞一 路

どつちものがのびる
どつちものがのびる
どつちものでのびる
墨根までのびる

それから どうだ
それから 知らぬ

親戀し

信濃 湯澤喜八郎

夕日

奉天 小川羊二

元は私は人でした。
森の魔法の婆さんに
蟻の魔法をかけられて
たうとう蟻になりました
元は私は人でした

夕日が落ちた
高梁 島に
夕日が落ちた
西のお空で薔薇を燃す
薔薇を燃す

めがね
豊橋 坂本 正
金めがね
金金金の
学校のお庭が映つてる
子供が百人
遊んでた

桃の實

小樽 笠井詩子

(賞) とうかんせ火花 畫由自



へしよ 木高 一尋校學小柳青京東

お背戸の お背戸の
桃の實が
眞赤に 眞赤に
なりました
明日はもぎつて食べませうと
妹がわたしに云ひました

つゆ草

京東 櫻井しき子

空はまつ青

と う も い 畫 由 自



翠 藤 近 六 尋 校 學 小 二 第 野 平 東 阪 大

野原は みどり
露がこぼれた
駒鳥の涙
いゝえ こぼれたは
つゆ草の露よ

鈴屋の小父さん

神戸花岡正春

チン／＼チン 一三三三

三ッ鳴つた うれしいな
三時が鳴つた うれしいな
鈴屋の小父さん
来る頃だ

こほろぎ

埼玉宇野精一

こほろぎが
コロ／＼コロ／＼

連り笑の連り笑の ぶんぶやい
影

広島寺岡賢一

とんでつた／＼田の中を
ふうわり／＼啼きながら
鳥の子供がとんでつた

さんび

長崎徳澄悦次

とんび とんび
何に見てる
油揚げほしくて
下見てる

雨蛙

群馬青柳花明

雨蛙のほれ
木の葉は すべる

豆 枝 畫 由 自



郎 一 貞 本 宮 四 尋 校 學 小 高 尋 宮 都 宇

あつちの方でもコロコロ
こつちの方でもコロコロ
川をコロ／＼
刺がした

路

大阪藤野キク子

田舎つばくら
白い路
山ほととぎす
暗い路
街の蝙蝠
あかい路
海原鵜は
青い路

迷ひ兒

東京有福孝二

灯りのぶんぶ
かなぶんぶ
ぐる／＼ぶんぶ
かつちんこ

下見てるのほれ
やつちきどつこい
のほれ

芒

東京塚本篤雄

すゞきの商賣
カーサカサ
朝から晩まで
カーサカサ
賣人も 買人も
カーサカサ

露の玉

奈良久保田俊一

光れ 光れ 露の玉
水晶に 紅玉に たゞ光れ
木の葉の上に
草の葉の上に
明日の朝まわ
たゞ光れ



幼年詩
若山牧水選

濃粉賣(賞)

愛知県愛知高
等小学校二年 大井繁一

あみ笠かぶつて
わらじばき
肩にこうりを
しよいながら
「自然薯の澱粉は
いりませんか」と
やつて来る

おいしやさま(賞)

滋賀縣三上
小學校第五 太田かすゑ

おいしやさま
人力車にのつて来やんせ
わたしの目だまをほじくつて
目ぐすりさしに來やんせか
しんばいしながらまつたら
やつぱりわたしの
目を見やんせ

群、目だまをほじくるなどといふ恐い言葉
があるくせに、矢張り娘さんのやさしい
心持が歌のなかに出てゐます。(牧水)

雨

山形縣酒田町 齋藤 與助
鷹町十五番地

雨が降る
風も吹いてる
蟬が鳴いてる
人がはしつてる
静かになつた

群、かきたてのまだ濡れてる繪の様にほつ
きりした景色が出てゐます。(牧水)

風

東京府中野町 長尾 園子
桃岡町三番三

かぜが吹く

綴方 編輯部選

夕立(賞)

千葉縣東金
小學校第五 村井 初枝

いつもの通りお友達のさわやんの所へ
遊びにいった。「さわやん本見せたいよ」と、
私がいふと「ア、かつさ」といつて
手品の本をかしてくれた。しばらく讀んで
みると、さわやんが「おれんそこをお
せたいよ」と、私が面白い所をよんで
るといつた。出きねさ「だつてよんでつ
だもんできな」わかつてるるけんがや
ださ」といつて、教へてやらなかつた。
さわやんの弟がとつぜん「雨がふつて
来た」と言つた。さわやんが「父やんま
よ、まく」と、いつた。さわやんのお父
さんはまくをかたした。すると雨がやん
だ。ぼんとへんな雨だ」と、お母さん
が言ふと「うつとす雨だな」と、いつて
又お父さんはまくをほした。こんだこし
や降りしなかつたや」といひながら入つ

降つてゐるので「人をばかやしやがる」といひながらさわやんのお父さんはまくを中に入れた。

おひる近くなるとやんだ。私は大いそぎで家へかへつて来た。おまけにさうりをはいてゐるので、さうりはびしょくになるし、足もよごれてしまつた。足をあらつてたゞみの上へ上つた。その日はボカ／＼暑いやな氣持のするお天気があつた。

自由畫「母さんの絞」

東京府下大井町 吉見由貴(十三)
北澤川一四七



て来た。すると又ふつて来た。少し位降つたつて又やむ」といつてみると、なほ一そ降つて来た。その雨はいつまでも

夏の山のぼり(賞)

名古屋市中區
小學校第三 吉本 辨治

僕は八月十五日後十時、祖母さんと伯父さんにつれられて覺玉山行の電車にのつた。まもなく電車は覺玉山についた。これから夜道をほつほつと三里あるかねばならない。祖母さんはこしにりんをつけて、りん／＼／＼とならして行く。伯父さんは肩にお辨當をおいねて

自由畫「きらくら」



和歌山市長町七ノ 阿部都喜子(三十)

子供が
風のうたを
うたつてる

群、風の吹くとはくの方でうたつてゐる子
供の歌が耳に聞える様です。(牧水)

スズメ

山梨縣多摩郡
小學校尋四 五味 久春

スズメノ
風ガフク

群、短い言葉の中に生き／＼とした心もち
がこもつてゐます。(牧水)

せみ

東京府下大崎町
厩本橋五三二 松井マサ子(十三)

しつしつ
静かに、さわいちゃだめ
今私がつるのだから
しつしつ

群、いつしやうけんめい／＼(牧水)

かぼちやの花

山梨縣多摩郡
小學校尋四 篠原 良信

雨がさん／＼ふる時に
あをい着物のをぢさんが
きいろいしやつほをひろけたよ

母ちやん

茨城縣鹿野郡
若柳校尋六 粟野 シツ

母ちやん行くなよ
おきやうに行くな
俺らさむしく
なつちやべなア

思ひで

茨城縣鹿野郡
若柳校尋六 齋藤 八郎

野口先生
くればい、
おんらに話しすればい、
その時おんらも
話します

タケヤブ

東京府中野橋
岡校尋一 長尾 港太郎

タケヤブノナカニ
タケガボヤボヤ
ハハチイル

行く。僕は左の肩にかばんをかけ、右の
肩に水とうをかけて行つた。うれしくて
たまらないから、さきへどん／＼走つて
いつた。二時半に行だけ山のふもとへつ
いた。それからそろ／＼山を登りはじめ
た。それからお辨當をおろして黄色な瓜
をたべた。おむすびを食べながら四方を
見ると、名古屋の町が一目に見えた。電
燈の光がきら／＼／＼と美しく光つ
てゐた。それから御本社や奥の院に参拜
した。まもなく夜が明けた。僕はさつそ
くかばんを下して日の出をしやせいに
かつた。日の出をしやせいで下へ下り
た。たきのそばへ来た祖母さんや伯父さ
んは籠にうたれた。僕もはいつたらあま
り寒いので飛出した。そしてかへり道に
むかつた。その時七時半であつた。ほつ
ほつ歩いていつた。僕は足がつかれて一
番後になつた。すしおんでもらつて、
すし歩いて覺玉山にいつた。それから
電車で家へかへつた。僕は生れてからこ
んなとはい道歩いたことも、こんなく
たびれたこともない。しばらくすると足
がいたくなつたので、そこら中はつて歩

私の名

愛知縣愛知郡
愛知校高二 川地 榮一

いた。あくる日もはつて歩いたが、湯に
はいつたらすしこしいのでこんなことを
つやつてみた。

「榮一」父や母や兄はかう言つて、僕を
呼ばれる。母は優しく、兄は荒く、父の
聲は太い。誰しも怒ると言葉が荒くなる
やうに、父の怒つて僕を呼ばれる聲は格
別こわく、よくちやみ上る。
「榮ちや」姉や近所の子達はかう僕に言
ふ。「榮ちやの家で菓子買つてこかい」近
所の子達は言ひ、「榮ちやの所へ呉服屋が
来たそうだ」内儀さん達は言つて僕の家
へ来る。僕の家、菓子屋は皆「榮ちや」
で通つてるやうだ。
「榮ちやま」乙組の前川君は時々あはて
るのかかう言ふ。僕はこんな言葉より川
地君と言つて貰ふ方が好い。
「オタワ」と言ふ。これは僕の學校での
仇名だ。級友が笑ひ半分に、少し争論で
もすると直ぐ「オタワ」「オタワ」と言ふ。
地理の時間、加奈院の首座を習つた時、

皆がわ／＼と笑つて、僕の顔が赤くなつ
た事もあつた。
要するに「榮一」「榮ちや」「榮ちやま」
と言つて貰へば、僕は素直に「ハイ」と言
ひ、「オタワ」と言はれると自然に怒れて
来るのである。

毛虫

福井縣高濱
小學校高二 常田 筆

うちの竹垣には、今きつたばかりのさ
くらの木がたばねでもたらしである。私
はその葉をとうとうとして手をかけた。そ
の葉裏には長さ五分ぐらゐる毛蟲がつい
てゐる。「あら毛蟲が」といつて手をのけ
た。私はもうきみがわるくなつてとるき
にならぬ。私は毛蟲をころそうと思つ
て、みきをきりかけたが、なか／＼きれ
ない。いまきつたばかりのみきからは、
あをいしるがでてる。おこつてまけた
みきはまがつて少しおれめがでた。ひつ
ばつたら皮がむけてきれた。その毛蟲の
ついてゐるみきを力いつばいに地になけ
た。毛蟲はびつくりしたとみえて、手を
はなしてじべたにころけた。そうして毛
虫にはいられた。

朝

横濱市本牧町 阿部英次
西郷操御邸内

太陽の昇るその頃に
庭の木では
朝の雫を落して

海へ行つたら

東京白金聖心 竹下英子
女子學院四年

海へいつたら黒くなれ
りようしの顔より黒くなれ
印度人より黒くなれ
墨をぬつたよに黒くなれ
海へ行つたら黒くなれ

せみ

若狭國大飯郡高 山守勝彦
濱小學校高二

あんづの木に とまつて
ジヤイ〜なくために
京都の生徒にとられて
ジヤイ〜〜まだないてゐる。

お日さま

滋賀縣三上 小林市郎
小學校尋五

ふゆはお日さま
小さい
なつはお日さま
大きい

ありの巢

東京府流橋町 日向桃子
柏木九九七

ありの巢 ありの巢
地面にボツンとまあるい穴
何匹ありがはいる
一匹はいり二匹はいる
三匹はいる
ありの巢 ありの巢
小さいありの巢
ありが三匹はいつた

カアチヤン

近江神崎郡 塚本シンジ五歳
川並塚本

カワイ カアチヤン
カワイ オチチヤ
ドウシヨイナア

雀の子

滋賀縣伊香 木保修二
郡伊香具村

四ツ角の方から「油いりませんか」油
いりませんか」といふ聲がした。そして
もう六十あまりのおぢいさんが、しはが
れた聲でこちらの方へきた。私はうらの
戸をしめて、庭さきをとほりぬけて家へ
かへつた。

火事の日

茨城縣鹿野郡 吉田のぶ
若柳校尋六

私は體操の時間なので、ならぶ所に
話をしていると、火の見る柱に一人の人
がのほつていつて、じやん〜〜とい
つまでもはたいてゐました。
私はどこが火事だかわからないから
かねをはたのを見てゐました。人がだ
ん〜よつて来てほんぶを出しました。
「新田のしちやんちや、おきちやんちだ
」と、私は「ほんちや、おきちやんちだ
」と言つてじむしつの方へかけよつてきま
した。さうすると、先生らも通りえんに
出て、「どこだ〜」と言ひました。おか
みさんも出て来て、「どこですわ」ときい
たので、私は「おきちやんちです」と
言ふと、おかみさんが「おきくちやんち
で行つてしまひました。
私にはじやまになるからじやまになら
ない處に先生らと話をしてゐました。

死んだ政夫

三重縣東郷郡 伊倉みさ
三小學校尋六

私の弟は、はしかで二歳の時、大正八
年の五月十一日に死んだのです。私の家
のは女の姉妹で男子の兄弟は一人もあり
ませんでした。そこへ男の子が生れたの
で、家中がだいいじに〜してそだてあけ
た。ところが二歳になつてから、ほうそ
にか、つて死んだのです。其の時には家
中のものやしんるいの人までみんなかな
しみました。おまけにたつた一人の男の
子であるから、なほさらかなしかつたで
す。ことにお父さんなどは、大そうかな
しまれました。私も大そうかなしんだが、
死んでからしかたがないと、少しはがま
んをしました。しかし、あのかあいいま
さちやんが死んでから、それから男の子
を、一人ほしい〜と思つてみますが、
まだ一人も出来ません。今では女の姉妹
ばかり三人です。家の人たちが夕飯をた
べたあとで、一人でも男の子があつたら
と、しじゆういはれてゐます。

私のうし

高知縣若良州 若宮勇
小學校尋四

私のうしは、うまなや、うまなやから追ひだ
してからくらをあてると、むきにとびま
す。とぶとおとうさんが大きな木でちか
らいつばいでた〜きます。さうすると、
飛ばんようになります。或日、私がひつ
ばつて田の道を行きよりますと、又とび
だしました。こまつて私がおとうさんに
いつて行きました。すぐおとうさんが來
て、こんどはそのうしをるながらひつば
つて行きました。それからおとうさんは
田をすかせました。すいてゐると、田に
大きなわれ石があつて、そのわれ石でお
とうさんは足を少し切りましたから、私
がこんどはすきよりますと、又うしがと
んだから、私がおかあさんにいひに行き
よりますと、おかあさんが「足をた〜き
よれ」といひましたから、私が「足をた
たくとちんばになる」といひました。そ
れちやせなかをた〜け」といひましたか

そつと瓦をあけたら
赤い雀が
ちいぢい鳴いた

煙
愛知縣栗原郡
宮田村宇神明
大竹亮寛

笹の先もゆれない
煙が何處へ
行かうと
まよつてゐる

流れ星
大阪市外粉濱
長尾小學校
佐山整一

まつくらな晩に
お星さんが海へとびこんだ
何しにとびこんだ

夜の十時
京都市丸太町
扶屋町西入ル
橋田文子

通る人が
少くなつた
電車もかすが
少くなつた
御所の方から
ふくろふが

ボーボー
夏の夜がふけた

秋の月
函館臨地
蔵町二三
小西花子十三

月のきれいな秋の海
波が光る
魚がおどる

學校に來たら
千葉縣山武郡東
金小學校尋四
小安三平

學校に來たら
僕の級には
友だちやまだ
一人二人三人
三人しか來ない

風の話
東京市駒本
小學校尋五
早川巨萬子

風がそをつと來て
高い木に何か言つた
そしたら木の枝が
代る代るうごいた
いゝ話らしい
私も聞きたい。

ら、ちからいつばい大きなほくとをもつ
て、うしのせなかをたゝきました。うしは
とつととんで行きました。とんで行きま
したから私が行つておさえてつれてきて
うまなやへはめました。それからあそび
に行きました。

犬の子
福島縣二本松第
一小學校尋五
野地弘子

私は八重ちゃんに犬の子をもらふや
そくをしました。

うまれて三日目の日にその犬を見に行
くと、私の考へとははんたいにながさが
五すくらるでした。私は「あらちんちへ」
(おは)といひました。八重ちゃんもつと
出すからあか(犬のおや)をそとにやつ
てしつて、びびつ(おなご)をおもての石
の上にもつて行きました。犬がそれをた
べてゐるうちに、八重ちゃんもゑんの下
子をやびきもち出してきました。こん
どは私にだかせました。そして「これは
おんなだからこんどおとこを出す」とい
つてゑんの下に入つて、こんどはまつく

ろな犬をだしました。まだ目もみえず、
いたのまにかまはないでおくと、まへ足
をふんばつてしこもあるけません。そ
しておんなの方は「くんく〜」となくけ
れどもおとこの方は「にやご」などとな
きます。私と八重ちゃんも犬は「わん」と
なくと思つてゐたところ「にやご」と
ないたので大笑しました。

苦しかった遠足
神戸市福春常
小學校尋一
藤池誠一

今日は八月十日でもう土用はあいたさ
うだ。けれども暑い〜ことはとうてい
お話にならない。で僕は今日のこの山行
きはあまりすかない。けれどあまりす
められたもんだから、とう〜きいちや
んと二人でゆくことにきめた。そこで魔
法瓶に一ぱいの水と、お辨當をすこしこ
しらへてもらつて、山をめぐつて登つた
さてはじめは暑い〜もんだからいや
いやながらもいつたけれども、登りはじ
めて山の半腹まで来て見ると、草木や名
も知らない雑木林があまり美しかったの
で、もう面白くなつて上へ上へとすん

猫の思ひ出
静岡縣三島
第一校尋四
井澤和夫

僕には好きな一匹の猫がありました。
もらひたてから蚤もあらず、それは〜美
しい猫でした。風はとりませんが、時々
雀を捕へました。それが一年程たつてか
ら、不幸が來ました。それが猫はよその
家へもらはれていつたのです。けれども
一日ほどたつてもどつて來ました。また
くれてやりましたが、またもどつてきま
した。三度目に一日つ立ても、二日たつ
てももどつてきませんでした。

うちの赤坊
神奈川縣青木
小學校尋三
山中泉

うちの赤坊は五月の八日にうまれまし
た。名は力とつけました。大へん大きく
てかはいらしうございます。此の間百日
目にしやしんをとりました。その時はか
りましたら十三斤半ありました。力ちや
んは大へんおとなしくてあまりなきませ
ん。いつもゆりかごの上でにこにこして
あそんで居ます。



通信

幼年詩の選後に

若山牧水

今度は實に住いのが澤山あつて、進むのに困つた。一通り選んだ上、等級をつけるのにまた一層の骨が折れた。

初めから十人位までの人たちの作は、みな殆んだ相違のない上出来のものだと思つて下さい。

思ひつきの作や氣のきいた作といふものを私は好まない。一例として大阪地方の或る學校からそれ／＼自作だと断り書をしてこられた十数篇のうち数篇を此處に引いて見る。括弧の中がそれ／＼の一篇である。

「朝顔さん、ちく音機、聞かしてんか。」
「青瓜のやも子、蔓からお乳を、のんでゐる。」
「雨の日は、松茸の行列だ。」
「しづくがひとりと、葉の蔭を這つてゐる。」

綴方短評

選者

△どうもすばらしくいゝのがありません。どうかみなさんいゝのをよこして下さい。一人一人について申しませうか。

△村井さんの「夕立」は夕立前後の情景がよく書けてゐます。霧を出したり入れたりする小父さんは面白いです。

△吉本さんの「夏の出立」は正直に書いてありますが、まだ書き足りません。もつと往き返りの途々の自然を——山や樹々の姿をていねいに見ると面白いのです。それから誰にうたれたりなんかするところでも、もつとくばしく書けばいきてきます。長くなつてもかまひませんよ。

△川地さんの「私の名」すこしませたところがありますが、一寸變つてゐます。

△常田さんの「毛蟲」はこまかく見てゐるところがよろしい。常田さんは「夕方」といふ題で書いてなりましたが、夕方らしい情景はあまり出てゐません。で、その主題となつてゐる毛蟲をとつて題としてなきました。

△吉田さんの「火事の日」はなんだか書き足りないところがありますね。どつか曲のかけ

「きうりがひとりと、葉に懸かけて、一服してゐる。」
いづれか小氣のきいた思ひつきの作ならざる。しかも、かうして並べ一見ると、生き生きとしてゐる管の子供の個性といふものほみな抜け落ちて、一人の先生が獨りで作つて種々な生徒の名をくつ附けて出したものと見ても善支へのない状態を呈してゐる。一人か二人か、別として、これらばかりを頭で作られたものである。概念の作に過ぎない。小手先の器用にすぎない。心からの作でない。
だからどれにも血が通つてゐないことになつたのだ。

同じ形のものにしても、
「雀、雀、風が吹く」
は、ぐつと一篇の歌の世界も廣く、生きても来る。

「竹藪の中に、竹がばや／＼、生えてゐる」
もまた生きた竹と生きた子供とが相違ぶ境地の清らかな歌である。そして、一帯にこのひかりを切つた思ひつきの作の多いのを悲しまざるをえない。

用紙はなるべく半紙型か半紙半分型位のものにして下さい。そして一枚に一篇か二篇を書く位にして、こちや／＼と書かせて下さい。(九月四日)

たやうなところだ、でも正直です。
△伊倉さんの「死んだ歌夫」はありふれた題材ですが、よく出来てゐます。

△野宮さんの「私のうし」正直でよろしい。
△野地さんの「犬の子」もさうです。

△藤池さんの「苦しかった遠足」あなたにはなにか、感情家ですね。よほど苦しかったらしいが、善いことや苦しいことをそのまま書かした。苦しかったと書くよりか、汗が出てどうした、足がだるくなつてどうしたとか、こまかなところをおとさないやうに。

△井澤さんの「猫の思出」可愛い文です。
△山中さんの「小品三つ」どれもすつきりしていいやみがあります。(ヤマト)

募集童話評

齋藤佐次郎

▽今月は殆ど新撰の人の童話評が集つたので大變に面白く讀みました。作の傾向が各々違つてゐる事も興味深い事でした。それからまた、少年少女の創作が非常に多くなつたのも面白いことです。その内には中々捨て難い純粋な作品がありました。しかし、少年少女の作者方に御注意して置きますが、中に随分亂暴に書いた原稿があつて困ります。あれ

新しく出た本

八八

◆腹つゞみ(遊澤青花氏著)——上品で滑稽味のゆたかな短篇創作童話を二十二篇集めたもので、著者は「小學男生」の主筆です。子供を氣邪氣にし喜ばせて、後に何のオチも残らないやうなお伽斯ばかり集める目的で作られたものです。俗悪な滑稽でなく、軽い上品な處がこの本のいゝ處です。十三四歳位迄の少年少女向きのもので、裝幀は岡本隼一先生の筆になり、二色刷挿畫三葉入り頗る美本。(四六判二一四頁、定價壹圓四十錢、京橋區南橋町、實業之日本社發行)

◆黄金の星——母と子文庫第三篇(岡田正夫氏著)ます、好評を博してゐる「母と子文庫」の第三篇です。母に死に別れ、父に亡くなられた三郎といふ少年が父が死際の、いゝ人におなりといふ言葉を忘れずに、感しいにつけ悲しいにつけ、北の空にキラ／＼と光る二つの星を父と母になぞらへ、「いゝ人」になるためにいろいろと苦しい目にあふ物語です。父星、母星の二つの光は常に三郎の世界の身を護つて、おしまひに三郎を幸福な世界へと導きます。十歳から十四五歳までの少年少女に愛讀される長篇物語です。(四六判裝幀箱入一九九頁、定價壹圓三十錢、東京小石川戸崎町九〇、創文社發行)

◆日の出づるまで——母と子文庫第四篇(茅野雅子女士著)此物語を十二歳から十六七歳までの少年少女の方におすゝめします。明と夜といふ兄妹に、孫代といふ美しい少女

も天才的の少女を加へ、これらの少年少女がいかに自分といふものをよくするために勵まされるか、またその母なる人が、どんなに子らのためを思つて苦むか讀みゆく中に息苦しくなる程深みある長篇物語です。讀んでしまふとホツ／＼とします。(四六判裝幀箱入二五〇頁、定價壹圓五十錢、創文社發行)

◆今度創文社の「母と子文庫」は現代家庭の好讀物として文部省の認定を得ましたことをお知らせいたします。(記者)

◆童話掲載外佳作 一粒の豆(伊藤繁△眞珠の窟(宮川繁則)△山の追刺(沼の風呂(水谷圭)△月の宮(向野鏡子)△馬鹿忠(武井勇二)△白い馬の若武士(作間樹)△敏夫さん(花田武)△魔法の杖(島田秋翠)△すいとんの墓の出来(宮崎金三郎)△三人の海賊(勝本俊子)△唐しるこ(小川(千葉友)△七百五十三郎(細野まんまる)△公園探偵(お土産田邊喜雄)△アーカーカス物語(梅田三良)△百舌のしやばり(糸井重吉)△元寇(横尾治喜)△朝智の成功(岡崎米造)△哀れな二人(村山喜月)△黒い少年(龍山二郎)△牛モー／＼(栗林清太郎)

◆童話掲載外佳作 △蛙(東京白井繁一)△めじろ(東京島田信一)△袋(東京高井宮)△燕(東京深田桐)△舟卸し(新潟山形正男)△だるま(函館伊藤調吉)△山の風(山形櫻田竹哉)△蛙、もぐら(東京岡崎信次郎)△金の鳥(東京堀切秀夫)△朝顔(東京石島エイコ)△鼯(東京森田繁夫)△プロペラ(東京山本秀治)△のるまの駕(奈良久保田俊一)△いゝ知(滋

また、學校へ行つてゐる人たちは、お父さんや、お姉さんに代筆してもらつてはいけません。御自分でお書きなさい。なるだけ「福」か「イ」で書くこと。鉛筆はうすくなつて讀むのに困ります。以上のことに注意して書いてください。わからない所があつたら、お尋ねください。

鸚鵡の手帖

▼東京神田の市場五箇町の氏神天王神社の有名な大祭は九月十四、十五の兩日行はれましたが、今年江戶祭のにぎはひを復活させるために七十五萬圓といふスバラシイ大金をかけて大々的にやりました。處でこのお祭で東京の各新聞にまで出て最も大評判だったのは町の少年達によつて歌はれた「祭唄」でした。唄は野口先生の作になり本居先生が作曲されたものです。

これは神田の住民たちが兩先生に是非にいつて依頼されたもので、野口先生が幾度か改作に改作されて出来上つたものです。その唄を大勢の子供がきれいな／＼衣裳を着て尺八に合せてみこしと一しよに出て歌つて歩いたのでした。衣裳代と稽古費で四萬圓といふだけでもどんなものだったか想像されませう。

▼長野縣飯田小學校に、竹内孝一氏主催で、本居先生作野口先生作の『金の船』児童演劇の演劇會が九月九日盛大に開かれました。▼東京の讀者諸君は今年度の有名な日本美術展



編輯だより

▼皆さん！秋も深くなつて参りました。この間まで編輯室の傍の大きな葡萄畑に紫色の房々した實が、どさつり下つておりましたが、それも今ではわれ／＼のお腹に入つたりして、影もなくなつて來ました。やがて庭の真ん中に突立つてゐる柿が真赤に色づくでせう。さうするといふ／＼秋が深くなるのでせう。さて、皆さん！お秋はありますか。記者達一同五福元氣で奮闘して居りますから御安心下さい。▼十月號もいよいよ止むを得ない差支へが出

▼皆さん！秋も深くなつて参りました。この間まで編輯室の傍の大きな葡萄畑に紫色の房々した實が、どさつり下つておりましたが、それも今ではわれ／＼のお腹に入つたりして、影もなくなつて來ました。やがて庭の真ん中に突立つてゐる柿が真赤に色づくでせう。さうするといふ／＼秋が深くなるのでせう。さて、皆さん！お秋はありますか。記者達一同五福元氣で奮闘して居りますから御安心下さい。▼十月號もいよいよ止むを得ない差支へが出

『金の船』の合本

▼第一輯 (第一巻初號より第二巻五號まで七冊合本) 定価一圓八十五錢

▼第二輯 (第二巻六號より第二巻十一號まで七冊合本) 定価一圓八十五錢

▼第三輯 (第三巻一號より第三巻六號まで六冊合本) 定価一圓九十錢

▼金の船のアンデルセン號 世界名作童話集(全一冊) 定価 三十五錢

『金の船』誌友募集

誌友になられた方には、大特典と、いろいろの便宜とがあります。誌友規則書御入用の方は、編輯所宛にお申込みになればすぐお送りいたします。

夫)△かみなり(松本榮本)△お星様(長野木下占代)△朝巖(高知角田富盛)△つばくら(東京松原武子)△月(東京山田由貴)△うま(茨城小川スエ)△いたち(兵庫澤井清)△雨と風(茨城山中きみ)△月(山梨三井善夫)△朝嵐(高知柳生義一郎)△くれんぼ(高知和田勝子)△向の山(秋田坂本まさる)△風鈴(京都佐野きよ)△朝日(長野丸山雅子)△時計(大阪田中武雄)△鈴虫(福井永井善太郎)△團圓(多男)△旅の小鳥(東京松原富子)△あめや(秋田山縣信吾)△紅百合(佐野チエ子)△夕立の後(長野小澤祐雄)△煙(愛知櫻井光男)△雨(秋田福谷キヲ)△小川(千葉石橋光子)△ひまわり(神奈川彦坂喜一)△かへる(三重村上信夫)△せみ(長野吉川邦四郎)△火事(茨城吉田藤雄)△蚤(北海道小西孝太郎)△竹(高知澤野勝利)△雀(大阪澤井松治)△か雨(茨城渡邊五郎)△とんねる(茨城山内豊喜)△はたお(滋賀市木金次)△グレイヤ(茨城茂呂直治)△いも(茨城大塚年男)△雨(高知岡崎光惠)△一匹のとん(廣島前島貞子)△朝外(山形齋藤興助)△夕方(福井永井善太郎)△建(秋田山縣信吾)△洗濯(京都渡邊羊)△ねずみ(京都橋田文子)△だん(仙臺竹川久)△私の俳名(愛知本岡卓)△魚取り(神奈川永島利貞)△秋の山里(東京笠井新次)△しんるるの子供(東京鈴木清夫)△白鳩(岡山渡井千代子)△鳥(神奈川特上流夫)△お節(山梨山縣小野節治)△あまの日の

▼『金の船』誌友募集所
東京 高橋善君 ○奈良 富山一枝君 ○東京 椎名興四郎君 ○高知 本間好子君 ○東京 島田信一君 ○山口 門司一男君 ○愛媛 木下俊夫君 ○東京 佐野安君 ○岩手 牛崎鐵四郎君 ○静岡 鈴木義直君 ○京都 岡本ナ子君 ○群馬 期込卯三郎君 ○大分 瀧江小學校 ○茨城 高橋徳三君 ○山口 大島義太郎君 ○京都 山上高太郎君 ○滋賀 中川虎次郎君 ○石川 星野爲雄君 ○東京 齋藤三枝君 ○東京 西川アキ子君 ○千葉 大島一君 ○奈良 岡田誠君 ○青森 條村潤平君 ○新潟 外山外記君 ○兵庫 中野清一君 ○和歌山 小村保太郎君 ○千葉 嵯峨清三郎君 ○東京 山崎榮君 ○大阪 金山信一君 ○廣島 河田憲太郎君 ○兵庫 松本光二郎君 ○福島 福田ネ子君 ○愛知 中村マツ子君 ○福井 高木繁君 ○東京 酒田芳雄君 ○岐阜 西昇君 ○長野 小野塚喜代治君 ○石川 中村雄之助君 ○石川 田村慎造君 (以下次號)



読者よ

▲金の船がますますよくなつていくので僕
はうれしくなりません。また、山六爺さん
は面白くなりました。これより一層面白くし
て下さい。(東京 有馬千代一)

▲ウチオモシロクヨクテキマス。私モコレカ
ラノキ永ク「金の船」ヲヨミマス。サヨ
ナラ。(神奈川 服部正吉)

▲記者様、僕は金の船の愛読者です。僕は金
の船を讀むと、他の本は皆いやになつてしま
ひます。中でも「罪なき娘を探れ」といふ
のが一番好きです。あの哀れな娘を助けに行
く王子は眞に男らしい人ですね。これから先
王子はどうなるでせうか。それが心配でなり
ません。早く「無事で歸れるやうに祈りま
す。(神戸 深川長治)

▲記者先生「金の船」が發展して嬉しうござ
います。益々高尚なる本となることを希望い
たします。私のクラスだつた佐藤勝雄君と若
王子君が近頃見えなくなりました。寂しいで
す。兩君の奮起を希ひます。(東京 荻舟)

▲着いた、着いた、金の船、
何が乗つて来たのか金の船
飛つて来た、飛つて来た、
面白い先生方のお話や

美しい少年少女の文藝が澤山に、
僕も次から乗せてもらはう。

▲何十萬といふ愛読者が出来ましたとのこと
結構なこと存じます。僕もその何十萬の一
人です。僕もつてゐませんが、僕の妹のた
つ子がつてゐますから、こゝしよに讀んでゐ
ます。(東京 愛住生)

▲僕はこないだ荒川へいつて舟を漕ぎました
おひるから行つて夕方まで舟の中で遊んでゐ
ました。泳ぎましたけれど、雨の後で水
が濁つてだめでした。それからしづみなどつ
さりとりました。歸りに「金の船」編輯所へ
よつて記者先生にあげようと思つたがやめま
した。なぜといふに「金の船」編輯所といふ
標札のやつてある立派な御門から中の方を
一寸のぞいて見ますと、背のり洋館が殿め
しく建つてゐたからです。市外 水泳の子)

▲いよ／＼秋になつて汗が出ない、僕は秋がす
きです。秋は冷たくて汗が出ない、木の葉
が黄く成るし、栗や柿がなるし、なんて秋
はいふのでせう。(山形秋雄)

▲「金の船」の御發展と先生方の御健康を祈
ります。(福岡 荒川清一)

▲残暑の脚見舞申上儀。(福岡 白土哲彦)

▲拜啓愈々初秋の候に相成りました。記者諸賢
の御奮闘を希望いたします。(新潟 湯澤生)

▲金の船！金の船！ 我はこの叫びを聞く
たびに血湧き肉躍る。(埼玉 椎名春三)

▲内父さん、はげちやびん
ちやびんであつたが

▲童話や童謡はいくらお出しになつてもかま
しません。おなほはか／＼お上手です。ど
し／＼お出し下さい。(記者)

▲妹達は「金の船」「金の船」つて大ききで
ごさい。實際より店頭で光つてをりま
す。(舞子 瀬戸より)

▲私もたつしやで童話や童謡を考へてをりま
すから、ご安心下さい。(東京 新野新一郎)

▲秋になると空の星が美しくなります。私
たちは秋になると星を仰ぐのをどんなにか樂
しみにしてゐます。母やき姉妹にとつてこの
世の唯一の慰安です。(北海道 松本静代)

▲岡本先生様、九月號の口癖の「ヘンナ老
人」は何といふ美しい繪で御座います。先
生はあゝいふ美をお書きになるとほんとにお
上手です。まア何といふ氣高い立派な王
子様でせう。ですけれど先生、あのお書き
人ば随分こはいのですね。大きな／＼鼻が垂
れ下つてゐて眼が悪魔のやうなものです。
わたくしは王子様のことと思ふと、あの先き
どんな目におおひになるのかと思つて心配で
心配でなりません。(京都 上山千草)

▲お母さんのお留守を讀んで思はず僕は苦
笑した。實は僕にはあれと全くいつていふ
位よく似た失敗があつたからです。僕の方は
角砂糖のやうなマインのちやなく、もつと
もつとおいしいモチ菓子だつたのです。記者
様、その時の光景を想像して下さい。だか
ら僕はあの對話を讀んでハハ汗をかきまし
た。しかし對話は大好きで、北海道 愛読者)

▲高橋五村兄！ 私はあなたの「母子草」に

やかんになつて
かばりかばつておもしろい

▲相變らず異彩ある気分がなによりです。妹
は一日頃より「金の船」「金の船」で次第にそ
の熱が増して、十日頃になりますと、金
の船あこがれ病になりました。いよ／＼「金の
船」御到來になりますと、とびついて一日中
離れません。ほんとに金の船の方などり離
しです。(横濱 住吉生)

▲私は先日天の橋立へ参りまして、昨日歸阪
いたしました。夕食後にボートを漕いで
銀波打よる奥湖の海へ行きました。静けき
海面にボートを止めて冷風に吹かれてちつと
してゐますと、海底の龍宮城から妙なる樂の
音が聞えてきます。私も俄に浦島太郎になつ
た氣がしました。そして今にも龍宮から迎ひ
の靈燈が波間に現はれてくるやうな氣がしま
したから、待つて居りましたが何も来ず徒
に夜が更けました。(大阪 ソイエス生)

▲秋と金の船！ なんといふつかしい名で
ごさいませう。私の机の窓から眺め
ました空や山の秋の氣分とびつたりひとつに
なりますわ。秋と金の船！ 私ばも一度かう
よんでみます。(静岡 長島百合子)

▲私のうちに三人の姉妹です。三人が三人と
も「金の船」の愛読者で投資家です。そして入
選したのが姉さんが二度、次の姉さんが一度
私が三度、私が一番成績がいいのよ、私が一
番投資したんです。(東京 藤やよりの子)

▲つかり執筆しました。先生は實に精神がい
い藝術を持った人だと感じました。御奮闘を
祈ります。それから「哀れな娘の船」の作者
伊藤温子さん！ 私ばあなたの持つ藝術にも
敬服します。いよ／＼素質の人と感じました。將
來の御奮闘を祈つて止みません(四國健一郎)

▲窪田先生の「源氏の若君」を讀みまして私
はおしまひまで讀切ること出来ないう程泣きま
した。ほんたうに可哀さうで／＼ならないの
ですもの。(信州 田川静子)

▲わたしは小學校に奉職中の女教員で御座い
ますが、これから童話を書いてみたいと思つて
も直していただく方がなくて困つてをります
わたくし進初學の者の手引草ともなりませう良書
が御座いませんでせうか。(神奈川 ふじ子)

▲記者様私は「金の船」創刊號からの愛読者
ですが殊に齋藤佐次郎先生の童話が私の理想
にびつたり合ふので愛讀致して居ります是非
毎號お載せを願ひます。山梨 小泉忠恕)

▲今後は毎號載ることになつてをります(記
者)

▲九月の秋期増大號は讀みかがあつていゝと
思ひました。編輯の苦心を十分に知りました。
この種類の雑誌の中で一番よく出来てゐるの
は何といつても「金の船」だと思ひます。私
の伯父さんは本屋ですが、「金の船」が一番よく
賣れる。何といつてもいい雑誌だからとい
つてゐました。(東京 山口市太郎)

▲神野先生の「守り袋の神様」はステキに面
白かつた。僕は神野先生の毎號先づ第一に
讀みます。一番大好きだから。(臺灣 一助)

▲僕も讀者の多いのは何れも驚きました。こ
れからも私の方から一層愛讀者を出したいと
思つてをります。(酒田 田中善助)

▲新聞・廣告の出たその日にお送りされた
のでほんたうにうれしかつた。表紙裏のこ
にあたつてゐる事に感心しました。岡本先生の敬
服の外ありません。目次を見まして、最初に
野口先生の童話と私の話を讀みました。次に
名食の子が伯爵になつた話を讀みました。次に
名食の子が伯爵になつた話を讀みました。次に
知恵におどろきました。源氏の四人の若君に
は知らず／＼泣かされました(茨城 五村生)

▲記者先生作曲を募集して下さいませんか。
(大阪 前田隆浩)

▲そのうちに募集致しませう(記者)

▲私窪田来月から五六人の友人と同人雜誌
「子供の國」を發行するつもりですが「金の船」
へ出た齋藤佐次郎先生の童話を轉載してもよ
いでせうか。(神戸 村口栄一)

▲「金の船」から轉載した旨を明記してまへ下
さいは差支へありません。(記者)

▲私の學校で「金の船」の誌友がこん月から八
人ふえました。(長野 窪川保)

▲記者先生、私は第二卷第一號からの愛読者
です。よろしく願ひます。(石川 濱谷孝)

▲私の童話を佳作にのせて下さいましたので
うれしくてその日一日はに／＼してをりま
した。先生にうかがひますが、私が童話や童
謡を作つてよろしいのでございませうか。それ
からいくつも書いたりしてよろしいのでござ
いませうか、お知らせ下さいませ。(勝本俊子)

△鈴木善太郎先生著 (定價壹圓參拾錢)

第一篇 たんぼゝの家

△沖野岩三郎先生著 (定價壹圓五拾錢)

第二篇 森の祈り

△福田正夫先生著 (定價壹圓參拾錢)

第三篇 黄金の星

△茅野雅子先生著 (定價壹圓五拾錢)

第四篇 日の出づるまで

△蘆谷蘆村先生著 (定價壹圓參拾錢)

第五篇 美しき國へ

体裁 四六版美裝箱入
平均二百四拾頁
口繪三色版凸版

『母と子文庫』は近く第六篇として
野口雨情 愛の歌
先生著

を出します。どんなにいゝ本である
かは實際について御覽下さい。十一
二才より十五六才までの少年少女の
讀物として一冊を出す毎により多く
の好評と讃辭を頂いて居ります

進呈 御申込みにより
「内容解説」
無代進呈す

東京小石川戸崎町九〇 創文社 振替東京三二八五番

懸賞創作募集

自由少年詩集 山本鼎先生選
幼年詩集 若山牧水先生選
綴方 編輯部選

〔注意〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなふうになし、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないようにしてください。用紙は自由紙に於いてください。幼少時や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に於いてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差上げます。次號刊は十月二十八日、發表は新年號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

◆一般讀者の創作◆

童話 齋藤佐次郎先生選
童謡 野口雨情先生選

〔注意〕 童話は二十字語二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。

定價 壹冊參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
壹ヶ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五
錢です。御註文の節はこの號だけ必
ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京三〇五七貳番

送) 御註文は必ず前金で御拂込み下さい
送) 送金は振替が一番便利で御座います
の切手代用は(壹錢切手)一割増しです
注) 第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名は必ずつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十年十月六日印刷納本(毎月一回)
大正十年十一月一日發行(二日發行)

編輯人 齋藤佐次郎
發行人 山本鼎
印刷所 東京市外田端三〇五七貳番
東京市外田端三〇五七貳番
電話小石川五三八七

將にシズンズ来る

諸君の爲代理部の開設

値段其他の御希望を明細記入の上御注文になれば責任を以て必ず諸君の満足の出来る品を撰擇します

マドンリ



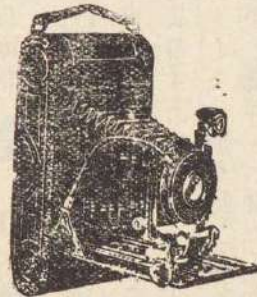
定價表
CBA
號號號
二十九圓五十八
二十一圓三十
その他五十圓まで

賞讚の的となれる



定價表
參貳壹
號號號
二十九圓五十八
二十一圓三十
その他七十五圓まで

素人向のきカメラ



定價表
十二圓
十八圓
廿二圓
廿六圓
三十二圓
五十三圓
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよくわたくし書金。御金は總て前金。事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

條信の部理代社本は速迅と實誠

(二後)へ

金の船 第三十卷 附録



山六爺さん

沖野岩三郎

七

紀伊の守はバビエボの喇叭を「五音の笛」と名づけて大事にしてゐましたが或日の事、その五音の笛を提げて森の中へ花を觀に行きました。丁度其時山は鶯の花盛りで、紅や白や斑がそれほ綺麗に咲いてゐました。で、紀伊の守は其花の美しさに見惚れて、あちらこちらと見歩いてゐるうちに、大事の大事の五音の笛を何所かへ置忘れてしまひました。紀伊の守が段々と山を奥へへ入つて行きました時、伯耆の守は右衛門が其後へ鶯の花を見に來ました。そして紅や白の美しい花を見て居るうちに、向うの方に笛のやうなものがあるのを見つけたので、拾ひ上げてよく見ますと、それはバビエボの笛でした。

伯耆の守は平生から面白可笑しい事はかり言つて人を笑はせる滑稽者でした。

四九



から、其の笛を拾つた時、ニコ／＼笑ひながら、心の中で『よしよし、これで一つ面白い事なしてやらう。』と考へました。
 伯耆の守は五音の笛を袖の中に隠して、池の方へ走つて行つて其所に突いてあつた小舟の縁に解いて、それに乗込んで池の真中まで漕いで行きました。そして袖の中から五音の笛を取出して、パー、ピー、プー、ペー、ポーと、出来るだけ長く吹き鳴らしました。
 さア大變です。山から野原から、猫も兎も鹿も猪も狼も皆なぞろ／＼ぞろ／＼と出て來ました。それを見た伯耆の守は舟の中に坐つたまゝ、ババ、ヒビ、プブ、ムエ、ゴボ、と面白可笑しく吹鳴らしますと、獸たちは最う堪らなくなつて、皆なぞんぶ／＼と水の中へ踊り込みました。狼も猪も皆な速者に泳ぎました。猫と兎とは少しく泳ぎました。けれども狼はちつとも泳ぐ事が出来ないで、皆な鹿の角に纏つて、恐ろしさうに水の中を眺めてゐました。
 何事が起つたのか知らと思つて、家々から大人も子供も皆な出て來て見ますと、まア何といふ事ぞう。一里四方の大きな池の中には獸の頭がウツ／＼してゐるのです。そして池の隅の所には、可愛い／＼狼の赤ちやんや猪の坊つちやん、鹿の鹿ちやん、お兎の息つちやん、兎の子供さん、鹿の子供さん、皆な泣いてゐるぢやありませんか。
 それを見た山六爺さんは屋根の上に駆け上つて、
 『おーい、大きい人、小さい人、爺さん、婆アさん、皆な来て下さい。』と大聲で呼びました。
 何事だらうと思つて皆なが駆けつけて來ますと、山六爺さんは屋根の上から、
 『皆さん、今のうちに、あの堤の上に居る狼や猪や鹿や兎の赤ちやんを皆な、山六學校へつれて行つて下さい。』と呼びました。すると皆な争つて、可愛い／＼赤ちやん達を山六學校の中へ抱いて行きました。
 婆アさんは吃驚して、學校へ走つて來て、
 『爺さん／＼、あなたは、こんな小さい兎の赤ちやんを千疋も集めてどうなさるお考へです?』と尋ねました。
 『これから小學校を開くのだよ。』と云つて山六爺さんは、に／＼笑つてゐました。

「さア、皆さん、今日から小學校が始まりました。皆さんはお行儀よくするんですよ」と言つたが、赤ちやん達はなかくお行儀よく致しません。めいめい勝手にはやア、にやア、ぎやん／＼と鳴き立てるので、爺さんも少しく閉口したと見え、

「今日は始業式ですから、これでお終ひに致します。明日のドーンからナインまで、人間共が遊ぶ時、皆さんはまた此所へ入らつしやいよ。」と言ひました。

それから山六爺さんは學校の屋根の上に這ひ上つて、大きな聲で、

「おうい、舟の中の人、其の五音の笛をもつて早く此所へ来て下さい……」と呼びますと、伯耆守は右衛門は、黙達の頭で一杯になつてゐる池の中を、岸の方へ舟を漕ぎつけて、山六學校の方へ急いで走つて来ました。

其時丁度山の中から歸つて来た紀伊の守は、伯耆守が五音の笛を拾つてゐると知つて、早速その笛を受取つて、學校の屋根から、パー……と音高く吹きました。

最う水の中で随分ながく遊んでゐたので、疲れ切つた猫と兎とは、陸の上に戻つて来て、ちよ／＼と學校の方へ走つて来ました。すると今日山六學校の「けだもの科」の一年生になつた猫と兎と仔供達は、お父さまやお母さまの顔を見ると、さも嬉しうに、教場から飛び出して行きました。周章で窓から飛び出さうとして、降り落ちて腰掛で頭を怪我した仔猫も五六匹ありました。

紀伊の守は、その次に、ヒヒ、プ、と吹きますと、鹿の角に纏つたお狼は鹿と一緒に悠々と泳ぎ歸つて来ました。そして山六學校の庭へ可愛い仔供さん達を連れ戻へに来ました。お狼の仔供は一度も高口から落ちて来ませんでした。皆な鹿の庭から、外へ飛び出しました。鹿の仔供は猫の鼻につく顔をして、口の所から静かに外へ出しました。

「ハ」と吹きますと、猪は勢よく駈けて来て、フウー！と唸りながら、ぶる／＼と身體を顔にせると、水が四方八方にばら／＼と飛び散りました。

「元氣がいゝなア。」と言つて山六爺さんは嬉しうに笑ひました。すると猪の仔達は、教場から庭へ飛出して行つたと思ふと、皆な庭の上に仰向けに臥轉んで、ころ／＼と轉がり始めました。

「元氣かいゝのネ。」と言つて婆アさんも笑ひました。

「ホー」といふ笛の音につれて、狼は皆な陸の上に登つて来ました。皆なづぶ／＼に濡れた毛から、ほと／＼と水の滴を垂らしながら、苦しうに長い舌を吐いて、はア、はアと太息を吐きながら、そのと學校の庭へ来たと思ふと、百五十疋の狼が一齊に、ウーウ、ウーウ……と吠え初めました。教場にあつた狼の仔供達も、小さい聲でウ……と唸りながら外へ出て行きました。

「婆アさん、狼は不平なんだ。」と言つて、爺さんは氣の毒さうな顔をしました。

「何が不平なんでせう？」と婆アさんは心配さうに問ひました。

「狼は一番後まで水の中に残り置かれたからです。苦しかつたのだらう？」

「それ、可哀さうに、では、明日からどう致しますか。」

「さア、明日は、あの池の東で五音の笛を吹いて、あの廣ッ場へ皆なを集めよう。そして笛を吹きながら池を西の岸まで渡らう。さうすれば、猫も兎も狼も猪も、皆な仔供さん達を東の

岸に残し置いて行くから。それを今日のやうに此所へ連れて来て、勉強させようぢやないか。」

「連れて来るのはいいが、何を教へるのですか？」

「山六學校の別科として『けだもの科』といふのを置くのサ。」

「けだもの科では、何を教へますか。」

「さア、まだ教科書は出来てゐないが、私はあの仔供さん達を兵隊さんにしよと思ふんです。」

「まア、兵隊さんに？ 兎や猫の兵隊さん少して、そんなものがありますか、此の世界中に……。」

「無いから、私が養成しようといふのサ。」

「兵隊さんにして何をさせるのですか？」

「無論戦争サ。兵隊さんは戦争するに決つてゐるぢやアないか。」

「誰と戦争をするのですか。」

「敵と戦争するのサ。婆アさんも解らない女ぢやアア。」

「だつて、猫や兎やお猿を相手に戦争する馬鹿はありませんでせうか。」

「そんな事はない、猫には鼠といふ敵がある？」



「まア可笑しい事を言ふのサ、婆アさんには二人がこんな事を言つてゐる所へ、右大將がやつて来て、

「爺さん、困つた事が起りました。」

と云つて、大變心配さうに頭を下げてゐました。

「何ですか？ 何ですか？」

と、爺さんば周章で訊きました。

「隣りの國が大旱天で、麥も米も穂も何も出来ないの、其所の鼠が何千何萬となく此の新しい村へ攻入つて来ました。」

「えッ？ 鼠が攻入つて来て、人間を咬むのですか。」

爺さんは色を蒼くして尋ねました。婆アさんは、もうぶろく顔へてゐました。

「人間を咬むではありません。東の入口にある畑の中へ入つて其所の麥の穂を、皆な咬み切つてしまひました。」

「あ、まうか。」

と云ふや否や、爺さんは紀伊の守の持つてゐた五音の笛をバババ——と吹きますと、猫と兎とが學校の庭へ皆な

走つて来ました。で、爺さんは其中の猫を百三十疋引つ

れて、東の畑へ鼠の征伐に出かけました。



筆主前年少本日 筆主生男學小

著生先花青澤澁

~~~~~

## 無邪氣な面白いお断

腹つみみ！ボコボンボコボンと鳴っている。何といふ可愛らしい音でせう。これは青花先生最近の傑作である童話廿二篇を集められたもの、無邪気なお断や滑稽なお断が澤山あります。例へば廣目屋の樂隊と競争しようとして失敗した狸の樂隊の一行、一度も笑つた事のないブル君のたつた一度の苦笑ひ、物を言つたお嬢様におどろかされたいたづら鼠、滑稽百出の茶目旅行をした三毛子と思吉、空想で金時計を買つたり、自動車に乗つたりした少年等、讀み出したら腹を抱へて笑はずにはゐられないやうな滑稽話ばかり書いてあります。

### 最新刊

定價一圓四十錢 郵税六錢  
四六判 函入 顔葉本

## 集話童

# 腹つみみ

## ■ 著生先花青澤澁 ■

### □ お伽集 ジャンケン國

定價九十五錢 郵税六錢

版 四  
青花先生のお伽劇は、讀んで面白いばかりでなく、憧れ勝ちな少年少女諸君の心理を深刻に描き、歌劇として最も意義あり價值あるものであります。

### □ お伽集 ベルの音

定價八十錢 郵税六錢

版 八  
学校や會合に於て餘興として演ぜらるゝ對話の資料として提供されたもので、悉く實演の出来るものばかり、殊に書中の「あべこへ小學校」は大評判。

## 實業之日本社 行發

東京市京橋區南鍋町二丁目  
振替貯金口座東京三二六番  
MICHIO MICHIO  
電話銀座 三三〇四 九九八

和伊の守は喇叭卒になつて、一番前に立つて、五音の笛を、マバ、マバマツバ、マツマバと吹きながら東の丘を越えて畑の方へ出て行きました。  
二町ばかり此方の方から見ますと、黄金色に實つた畑の邊の藪が、風に靡かされるやうに、さばざはと動いてゐました。  
「風だ〜！ 猫共確乎してくれ〜！」  
と爺さんは大聲に叫びました。  
けれども猫は黙つてゐました。  
「爺さん、それでは駄目です。確乎してくれなんて、そんな命令があるのですか。」  
と、婆さんは泣聲を出しました。  
「では、どう言へばいいんだい？」  
と、爺さんは泣聲を出しました。  
「前へ…進め〜！と言ふんですよ。」  
「さうか、そんなら前へ…進め〜！」  
と云ひますと、猫は、と、と、と、と前の方へ進んで行きました。そして畑の中で鼠の群と大戦争を始めました。  
和伊の守は親りに、マバ、マバマツバ、マツマバ、マ…と五音の笛を吹いてゐました。



大正八年十月十六日 大正十年十月六日印 朝 日 報  
（前 三 種 郵 便 掛 可） 大 正 十 年 十 一 月 一 日 發 行（毎 月 一 回 一 日 發 行）

東京 キンノツノ社 發行

# お買物は三越

低廉て品の確かな三越



◆御手紙で御注文は宛名を  
「三越呉服店通信販賣部」と  
お書き下さる様御願します  
◆定休日は十月二十五日と  
十一月十日、十一月廿五日

- ◆ 子 供 洋 服 陳 列 會 (十月廿一日より)
- ◆ お 召 小 紋 陳 列 (十月廿三日より)
- ◆ 格 安 反 物 賣 出 し (十一月一日より)
- ◆ 丸 襟 帶 陳 列 (十一月一日より)
- ◆ 半 襟 帶 揚 陳 列 (十一月一日より)
- ◆ 婦 人 世 界 女 流 日 本 畫 展 覽 會 (十一月一日より)
- ◆ 絣 類 陳 列 (十一月十日より)
- ◆ 石 川 縣 工 藝 品 陳 列 會 (十一月十日より)

## 三越呉服店

◆ 町 河 駿 京 東 ◆

(定 價 參 拾 錢)